

山梨県北都留郡上野原町

長峰砦跡

中央自動車道改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000. 3

山梨県教育委員会
日本道路公団東京建設局

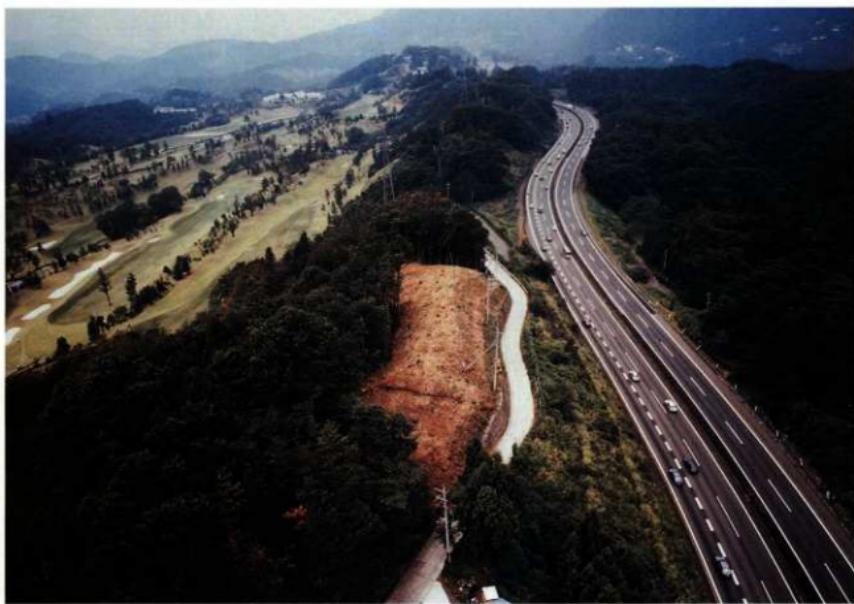
山梨県北都留郡上野原町

長 峰 碧 跡

中央自動車道改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000. 3

山梨県教育委員会
日本道路公団東京建設局



第1次調査の状況（東方から、手前左の林地が第2次 中央上方に第3次調査区 1995年11月撮影）



第3次調査の状況（北方から、左側にあった1・2次調査区は建設工事に入っている 1998年8月撮影）

序

本報告書は、中央自動車道改築（上野原一大月間）工事に先立ち、1995・1997・1998年度の3ヵ年にわたって発掘調査された、山梨県北都留郡上野原町大門に所在する長峰砦跡について、その成果をまとめたものであります。

長峰砦跡は、本県の東端部、中央自動車道下り線の談合坂サービスエリアの東約1kmに位置し、中世にはすでに「長峰」と呼ばれた、標高は340~380m前後の、東西に長く伸びる尾根状の地形に立地しております。付近は古くからの交通の要衝の地であったとみられ、それが近世以降には「甲州街道」（正しくは甲州道中）として整備され、さらに現代ではわが国有数の物流路線である中央自動車道に引き継がれているところであります。

長峰砦跡は、かつての甲武相国境地帯にあって、いくつかの関連城郭遺跡群の一翼をなすものと考えられていますが、遺跡の中央を縦貫して建設され、1969（昭和44）年3月に共用の始まった中央自動車道などにより、大きく旧鐵を損なわれてしまいました。いま再びその拡幅工事にかかるということで、3万畝余の範囲について慎重に調査し、長峰砦跡にかかる歴史の把握に努め、記録の上で後世に伝えることになったわけであります。その成果につきましては以下に報告するとおりでありますが、概観すると砦跡に結びつく遺構としての二、三の郭、尾根を切断する堀跡、斜面を横に走る横堀跡などがあり、堀跡からは鉄砲の弾丸などが発見されたこと。尾根をやや下がった位置に尾根筋を縫うよう道路状遺構が断続的に見られ、それが江戸期に整備された「甲州街道」の跡と見られること。地元の大門地区が祭祀してきた丸山稻荷社の移転に伴い、その跡が具体的に記録できたことなどがあげられます。

長峰砦跡における発掘調査からはこのような成果が得られたわけであります、これをまとめた本報告書が本県における中・近世の地域社会の解明の一助となれば幸甚であります。

末筆になりますが、調査にあたり種々ご指導・ご協力いただきました関係各位、並びに調査に従事された皆様に厚くお礼申し上げます。

2000年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

例　　言

- 1 本書は、山梨県北都留郡上野原町大柄に所在する長峰砦跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、中央自動車道改築工事（上野原一大月間）に伴うものであり、山梨県教育委員会が日本道路公団東京建設局の委託を受け実施した。
- 3 発掘調査および整理調査は、山梨県教育委員会の調査機関である山梨県埋蔵文化財センターが行なった。
- 4 現地での発掘調査は、つぎの3次にわたって実施されたが、本報告ではこれらをまとめて報告する。

第1次調査（平成7年度本調査）	1995年9月1日～11月13日	（調査担当：中山誠二・保坂和博）
第2次調査（平成9年度本調査）	1997年11月21日～12月25日	（調査担当：伊藤伸一・笠原みゆき）
第3次調査（平成10年度本調査）	1998年5月7日～8月31日	（調査担当：出月洋文・湯川修一）
- 5 本書の執筆は、調査を担当した保坂和博・笠原みゆき・湯川修一・出月洋文が分担して行い、出月が編集した。執筆分担は、第二章を湯川、第三章第1節を保坂、第三章第2節及び第四章第2節を笠原、それ以外が出月となっている。
- 6 写真撮影は、遺構については各担当者が担当し、遺物の撮影は塙原明生（日本写真家协会会员）に委託した。
- 7 各年度の空中撮影による遺構全体測量は、（株）シン技術コンサルに委託した。
- 8 本調査に係る資料（出土遺物、記録図面・写真等）は一括して、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 9 発掘・整理調査に際し、下記の方々・機関からご協力・ご教示を頂いた。記して感謝申し上げたい。

日本道路公団上野原工事事務所、上野原町教育委員会、帝京大学山梨文化財研究所、小西直樹（上野原町教育委員会）、宮澤公雄（帝京大学山梨文化財研究所）

（順不同・敬称略）

本文目次

口 緼	
序 文	
例言・凡例	
目 次	
序章 調査報告のあらまし	1
第1章 発掘調査の概要	
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の方法と経過	1
第3節 発掘調査の経過ならびに概要	1
第4節 調査組織	2
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果 一発見された遺構と遺物一	
第1節 第1次調査の成果	6
第2節 第2次調査の成果	8
第3節 第3次調査の成果	18
第4節 出土遺物の理化学的分析	27
第4章 調査のまとめ	
第1節 長峰砦跡について	30
第2節 丸山稻荷について	34
第3節 旧「甲州街道」について	36
第4節 結 語	38
(参考文献)	38

挿図目次

第1図	調査区の設定状況	1
第2図	長峰砦跡の位置とその周辺	5
第3図	第1次調査の調査区配置図	6
第4図	第1次調査の遺構と遺物	7
第5図	第2次調査の調査区全体図	9
第6図	97-A区 主要部	9
第7図	97-A区 丸山稻荷周辺の遺構	10
第8図	97-A区 丸山稻荷周辺の遺構	11
第9図	97-A区 出土遺物(1)	12
第10図	97-A区 出土遺物(2)	13
第11図	97-A区 出土遺物(3)	14
第12図	97-A区 出土遺物(4)	15
第13図	97-A区 出土遺物(5)	16
第14図	97-A区 出土遺物(6)	17
第15図	第3次調査の調査区全体と 主要出土遺物の分布	19
第16図	98-A区 郭1・横堀跡および郭2	20
第17図	98-A区 郭3	21
第18図	98-A区 堀切跡	22
第19図	第3次調査出土遺物	23
第20図	98-B区 道路状遺構	26
第21図	鉄砲玉分析結果	28
第22図	中央自動車道の計画段階の地形図	32
第23図	丸山稻荷の遺構平面図	35
第24図	旧甲州街道の確認	37

図版目次

図版1	長峰砦跡周辺の空中写真 (1963年撮影)
図版2	95-A区の調査状況
図版3	95-A・B区の調査状況と出土遺物
図版4	97-A・B区全景・97-A区土壘状遺構全景
図版5	97-A区の調査状況
図版6	第2次調査出土遺物 (瓦類)
図版7	第2次調査出土遺物 (瓦類・錢貨)
図版8	第2次調査出土遺物 (陶磁器)
図版9	第3次調査全景・調査前状況
図版10	98-A区郭1の調査状況
図版11	98-A区郭2・横堀跡の調査状況
図版12	98-A区堀切跡の調査状況
図版13	98-A区堀切跡の調査状況
図版14	98-A区郭3の調査状況
図版15	98-B区道路状遺構の調査状況
図版16	第3次調査出土遺物

序章 調査報告のあらまし

1 はじめに

長峰砦跡（ながみねとりであと）は、山梨県北都留郡上野原町の大門地区に所在した中世（戦国時代）の遺跡の一つです。

この報告書は、長峰砦の跡を中心に約30,000m²余りを対象にした埋蔵文化財記録保存のための調査の成果をまとめたものですが、この章では本書を利用する際の手引きとなるよう、調査の概要を整理しておきます。

2 長峰砦跡の概観

ここでは調査成果を理解する上で、まず長峰砦跡とはどのような遺跡なのかについて、長峰の地名にどのような歴史があるかなどを含めて確かめておきますが、これについての詳細は第2章に説明されています。

長峰砦跡は、山梨県の東端部、北都留郡上野原町大門地区に所在した、比較的小規模な中世の砦（山城）の跡です。この付近は戦国時代の終り頃、甲斐と武藏・相模とが国境を接するところで、この砦は、当時こうした国境地帯によく見られる、「境目の城」と呼ばれるものの一つで、周辺のいくつかの城郭と結びつきを持ちながら国境警護の役割を担ったものと考えられてきました。

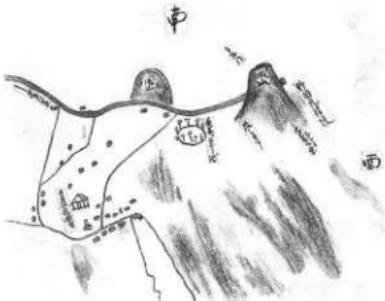
そもそも「長峰」とは、砦の東方の鷺ヶ崎と呼ばれた辺りから西方の矢坪に至るまでの尾根状の地域を指す古い地名です。南方と、北方を東流する相模川（桂川）とその支流の仲間川の二つに挟まれた細長い地形について、少なくとも戦国時代ごろにはすでに長峰といふ呼び名があったことが知られていますが、江戸時代には砦跡の付近だけを長峰と呼ぶようになったようです。

長峰の尾根には、今回の調査の中で縄文時代の人々の活動の痕跡も見出されました、尾根筋を伝っての人々の行き来はそんな古い時代から続いた、やがて戦国の世になると周囲で関東や甲州の武将たちの対立の場になると出てきました。こうした歴史的背景をもとに長峰砦跡が登場したと見られます。

なお砦跡の名称ですが、江戸後期に編まれた『甲斐国志』に「長峰砦」の名が用いられており、現在ではそれを踏襲しながら、遺跡であることを意味する跡の字をつけ、こうした遺跡名となっています。

3 発掘調査の経過

さてついに発掘調査の中味に入るわけですが、はじめに調査の着手前と着手後の経過について、第1章にもあります、その概略を見ておきます。



「大門村絵図」に描かれた長峰砦（模写、一部改変）

(1) 調査に至るまで

前節では、発掘調査前の長峰砦跡にかかる情報を整理したところですが、しかし現状は、それが実際にいつ頃、誰によってつくられたのか、またどのような戦いの歴史にかかわったのかなどについて不明な点が多く、また1960年代後半の中央自動車道建設工事などによる影響のため、元の姿をよくとどめない状況で経過していました。このような中で1990年代後半になって再びこの遺跡が中央自動車道拡幅工事の計画区域に取り込まれたため、工事に先立ち平成7・9・10年度の3年にわたって発掘調査が実施されることになりました。

(2) 発掘調査の方法・経過

道路用地の確保が段階的に行われたため、発掘調査もそれに合わせ、区割りをして順に進められ、その区の調査が終わると引き続き工事が始まるという経過であります。

調査前の現状はほとんど山林であったため、調査は立木等の伐採除去から始まり、また調査区の大部分が急斜面のため、表土の除去から遺構確認までの作業は基本的には人力によるものとなりました。



発掘調査の作業風景（堀跡 1998年7月）

概ね10cm程度の、主に腐植土からなる表土を取り去る

と遺構確認が可能な状況になりましたが、堀跡などの掘下げは深く、土量も多くなりました。

地中から表れた遺構や遺物は、平板測量、光波測量器によるノートパソコンへのデータ取り込み、写真撮影などによって記録化を進め、また航空写真測量による全体的な状況記録も行われました。

4 発掘調査の成果

細かな内容は第3章に報告のとおりですが、第3章では調査年次別となっているものをここではまとめて、さらに年代をおおて概観します。

(1) 塙の時代以前

塙が築かれた頃より古い時期については、明確な遺構は見つかっていませんが、遺物はわずかながら確認されています。

縄文時代のものと見られる石核（石器を作る石材の芯）や石鐵、平安時代頃の土師器や須恵器の小破片などが、調査の中で確認されています。とくに黒曜石製の石鐵2点については、理化学的な産地分析の結果、1点は長野県諏訪市北部、もう1点は伊豆の神津島に産地が求められる原石で作られたものとのことで、この付近に暮らした縄文人の交流範囲が見て興味深い分析結果といえます。



縄文の狩人の落とし物（?）

—諏訪市北部産黒曜石で作られた矢じり—

(2) 塙が営まれた年代の遺構・遺物

調査成果の中で戦国時代末の長峰塙に結びつくと考えられるものについては、山地を整形して設けられた郭（くるわ=見張り小屋などを置く平坦地）の跡、尾根を切断する堀（堀切）の跡、斜面を横に走る横堀の跡などがありました。

また遺物として注目されるものに、堀跡から出土した鉄砲玉2点があります。これも成分分析の結果、通常は鉛で作ることが一般的なのにに対し、青銅製であることが確認されました。鉄砲玉の材料とするため賣の悪い銅鉄を集めることを命じた文書が知られていることを合わせると、小さな遺物から戦国社会の一端が浮かんで

くるようです。

(3) 塙の時代以後

今回の調査では、長峰と呼ばれるもとになった尾根状地形のやや下がった位置に尾根筋を縫うよう幅1m余り



旧甲州街道の跡と見られる道路の跡

の道路の跡が断続的に確認されました。これは江戸期の「甲州街道（正式には甲州道中）」に相当すると見られるものでした。

また調査対象地の東寄りの一画に丸山と呼ばれていた小さな峠がありました。ここには小さな稲荷の社があり、周辺に土壘のような施設が見られたため、塙の付属施設の存在が予測されました。結果的に中世に遡るものは見られず、移転した跡の丸山稲荷の状況の記録ということに終わっています。

5 調査成果のまとめ

調査成果の一つひとつの事実から、どのようなことがいえるのかは、調査のまとめとしての第4章にいくつかの観点により説明されています。ここではそれを簡単におさえ、また調査で十分行き届かなかった課題などを挙げ、今後の参考としておきます。

(1) 調査成果からいえること

長峰塙跡は、その歴史的な全体像を理解するには、すでに手掛かりの多くが失われているものであります。それでも発掘調査を通じて次のような歴史をとらえることができるものと思われます。

この長峰の地には、縄文時代以来の人々の何らかの活動の跡も断片的ながら確認され、ここが古くからの交通の要所であって、戦国時代にはこの周辺で甲斐の勢力と関東の諸将たちとの勢力争いが行われています。そこで交通を掌握し、戦略的提点の一つとするための山城、すなわち長峰塙が築かれました。

その後、江戸時代になって塙の跡の傍らを通る山道が五街道の一つの甲州道中として整備され、ここを行き来する旅人は塙の時代を偲びながら通行していました。

また地元の大門集落の西の外れの丸山には、福荷の祠が祭られていきましたが、砦跡の範囲を確認する作業の中で、それがおそらく江戸時代の終わり頃からのもので、ある時期までは瓦屋根の、祠を覆う小堂が建てられていましたことなどもわかりました。

(2) 残された課題

この発掘調査の主題である長峰砦跡は、在りし日の姿をとどめる部分はわずかで、砦に直接結びつく遺物もたいへん少量がありました。そのため砦の全貌を把握し、年代や構造、機能などを明らかにすることについては十分できませんでした。

これまでの研究で、長峰砦跡は周辺のいくつかの同様な城郭遺構と連携をもちながら歴史的役割を果たしたものと考えられていますので、それら周辺遺跡の調査をま

って、この長峰砦跡の位置づけをより確かなものにしていく課題があります。

また長峰砦跡はこのたびの中央自動車道拡幅工事の中で大部分が姿を消し、史料の中にも知られる「濁り池」や街道沿いに建てられていた芭蕉句碑など、かつての砦跡周辺の風光明媚とうたわれた景観もまったくというほど過去のものになってしまいました。

古くからのこの土地の歴史は、現在の中央自動車道がつくりだした新しい景観の影の部分にひきつがれているものということもできましょうが、一方で中世に砦が築かれたこと、甲州道中の時代の街道の脈わい、また濁り池にまつわり雨乞いの習俗や薺の実取り、丸山に福荷が祭られていたことなどについても、それらをどのように語り継いでいくかということも課題の一つになると思われます。

第1章 調査の経緯と概要

第1節 発掘調査に至る経緯

今回の長峰砦跡の発掘調査は、日本道路公団による中央自動車道改築工事（上野原一大月間）に先立ち、路線内の一連の埋蔵文化財の記録保存事業の一環として、平成7（1995）・9（1997）・10（1998）年度の3ヵ年にわたって実施されたものである。

日本道路公団では、既に供用されていた中央自動車道の混雑緩和のための拡幅が計画され、着工するに及んで計画地内の埋蔵文化財の取り扱いについて県教育委員会（学術文化課：当時）と協議を持ち、工事区域における周知の埋蔵文化財の記録保存を進めることを確認、その個所付けの一つに長峰砦跡があった。

こうした協議を受けて、平成7（1995）年9月に、山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査に着手した。協議の中で当初に調査計画の対象とされたのは32,000m²であったが、用地買取の遅延等があって初年度は5,000m²のみで、以後は用地取得の状況により平成9および10年度での実施となった。

年度ごとの調査区の区域割りは、第1図のとおりである。

第2節 発掘調査の方法

発掘調査は、年度ごとに担当者が異なっているので、細部において若干の差異はあるものの、基本的には次のような手順で行われた。

調査前の現状がほとんど山林であったため、工事関係者の協力を得ての伐開作業から始まった。また立木等の除去後も、調査区の大部分が急な傾斜面のため、通常行われる重機による表土剥ぎ取りの行えたところはわずかで、基本的には表土の除去から遺構確認までの作業は人力によるところが多かった。

平均10cm前後の、主に腐葉土からなる表土を取り去ると遺構確認が可能な状況になったが、必要に応じてトレーナーを設定し、遺構の把握に努めた。

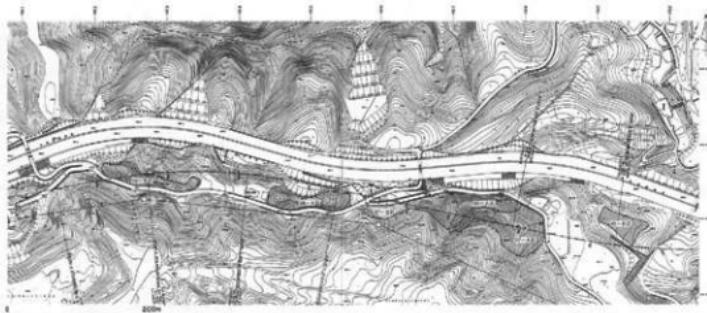
遺構調査中の図面作成は、平板測量や遺構方実測、光波測量器によるノートパソコンへのデータ取り込みなどによって進め、各年度の調査の最終段階では外部委託による航空写真測量を行っている。遺構図の測量基準は基本的に国上座標によっているが、部分的に国土座標に即しながらグリッド設定を行い記録作成を行った個所もある。

第3節 発掘調査の経過並びに概要

すでに見たような経緯で発掘調査が進められたが、その詳細は第3章に年度ごとに報告する。ここでは、それらの経過や全体像を把握する意味で各調査の概略を確認しておきたい。

（1）第1次調査（平成7年度）

平成7（1995）年の9月1日から11月13日まで実施した。ようやく用地確保がなされた2地点での調査で、旧甲州街道を踏襲した町道に面する2,000m²を95-A区、一段下がった現中央道脇の3,000m²を95-B区としてそれぞれに全面調査を進めた。調査の結果、95-A区では、尾根部で炭化材の詰まった土坑1基、尾根をやや北に下がった斜面に幅1m余の道路状遺構を確認した。また95-B区では縄文時代と近世の遺物若干を検出するも、近年に地形変更を受



第1図 調査区の設定状況

けた状況が見られ、歴史的遺構は発見されていない。

(2) 第2次調査（平成9年度）

翌8年度には用地の確保が進展を見せず、第2次調査は、平成9（1997）年の11月21日に着手し、12月25日までの間、95-A区を挟んでその東側に続く区域を97-A区、西側に接続する部分を97-B区とし、合わせて11,500m²を対象に実施された。このときの成果としては、97-A区で中央道工事のため移転された丸山福荷神社に結びつくものと思われる一間半四方に配置された礎石や瓦、さらに寛永通寶など近世から近代にかけての錢貨や磁器片が検出された。97-B区では明確な遺構は確認されていない。全体的に長峰砦の東側の出構え等に相当する遺構の存在が想定されたものの、結果的にその造営年代である戦国期の遺構・遺物はまったく確認されなかった。

(3) 第3次調査（平成10年度）

第3次調査は10（1998）年度に、5月7日～8月31日の間実施された。対象とした面積は1万数千m²であったが、それまでの調査成果と進捗段階の検討などにより、最終的にこの年次の調査面積は9,000m²となった。ここでも砦跡の中心部と目される東半部を98-A区、西側出構え等が予想された西半部を98-B区と仮称して調査を行った。98-A区では、堀跡などの戦国期の長峰砦に係る遺構が、また98-B区では近世以降の旧甲州街道に関連すると見られる道路遺構などが明らかになっている。

(4) 整理調査（平成11年度）

3ヵ年分の現地調査の成果をまとめて発掘調査報告書を作成するための整理調査事業を平成11（1999）年5月25日より進め、本書の刊行をもって終了した。

第4節 調査組織

長峰砦跡の発掘調査・整理調査にかかる組織は以下のとおりである。

調査主体 山梨県教育委員会（所管課：学術文化課 ※平成9年度以降は学術文化財課）

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 平成7年度（発掘調査）

　　調査研究第一課調査第二担当 保坂和博

　　調査研究第二課調査第三担当 中山誠二

平成9年度（発掘調査）

　　調査研究第二課調査第四担当 伊藤伸一・笠原みゆき

平成10年度（発掘調査）

　　調査研究第一課調査第三担当 出月洋文・湯川修一

平成11年度（整理調査）

　　調査研究第一課調査第二担当 出月洋文

　　調査研究第一課調査第三担当 湯川修一

　　調査研究第二課調査第五担当 保坂和博・笠原みゆき

発掘調査作業員

網野房夫、安藤猛夫、飯島繁、飯島住好、飯島文男、市川保、市川ヒサ江、市川美恵子、市川玲子、臼井宏、尾形憲司、尾形美登、岡部照、長田貞夫、落合金男、小野澤満、小花洋介、小俣喜一、小俣順子、加藤文宣、上条良作、佐藤美千代、清水邦枝、清水城治、志村昭二、志村幹生、志村光代、白鳥和男、岡口和男、高木喜代美、出羽和夫、富田寛、中井清美、中村克己、畠山朝雄、東山令子、福田眞亀、丸山英子、森 薫、矢野峰子、山口琢磨、山崎公江、山崎恵子、渡辺和子（以上、現地調査）

雨宮一二三、石原清子、石原由美子、垣内律子、小菅春江、佐野眞雪、塩島富美子、篠原勝男、内藤由紀子、名取洋子、平川涼子、古屋茂子、望月厚子、矢崎 緑（以上、整理調査）

第2章 長峰砦跡の環境

第1節 長峰砦跡の位置と地理的環境

長峰砦跡は、山梨県の東端部、北都留郡上野原町大門に所在する。上野原の市街地から旧甲州街道（現町道）を西に通ること約3km。鶴川右岸の急勾配の坂を上り山間地にかかると、東西方向に細長い尾根が約2.5km西の矢坪まで続く。現在は砦跡付近だけをそう呼ぶことも多いようだが、古くはこの尾根全体が「長峰」とされていた。この砦の名称もこれに由来する。この尾根の中ほど、大門集落を通り越し視界が開ける辺りが砦跡の所在地である。

文化11（1814）年成立の『甲斐国志』には、長峰の尾根の東端部を「鳩ヶ崎」、砦跡付近は「鳩ヶ巣」と称されていることが見える。また、「長峰」の名を伝えるものに、現在は野田尻の西光寺本堂に懸かる「大永五（1525）年」銘の鰐口が知られている。その銘文中に「甲陽都留郡長峰鰐口」と見え、かつて野田尻宿の南にあったという長峰山長福寺が所有するものであったと伝承されている。

砦跡周辺の地形は、おおむね山地で森林に覆われている。標高は砦跡付近で340～380mであるが、斜面の勾配は急である。巨視的には秩父山系の南端部にあたる。東西方向の尾根に平行するように深い峡谷を形成して、北に鶴川の支流である仲間川が東流する。仲間川の合流を受けた鶴川は南流し、JR中央線上野原駅の南側で本流である相模川（桂川）に合流するが、その辺りの河谷には典型的な河岸段丘の発達が幾重にも見られることが知られる。

砦の主体部とみられる小峰は、小字名「城山」となっている。ここから四方を眺めると、とりわけ東方の眺望がきくことがわかる。上野原の町並みをはじめ県境の山々まで一望することが可能である。また、仲間川の峡谷の向こう側には大倉山、南には桂川の峡谷にそびえる四方津御前山を確認することができる。次節で述べるがこれらは山城の立地するところである。地理的にもこの地は砦の築造に適した条件を備えているといえよう。

なお、周辺の山林は近年の開発のため、その姿をだいぶ変えている。昭和44年に共用された中央自動車道は砦跡の一部をすでに通過しており、さらに砦跡の南側にはゴルフ場が造成されている。かつて、砦跡の東方に「濁り池」と称される沼沢があったことが知られる。周囲300mほどで、そこには松並木が見られたそうである。常に水を満え、旱天時に水乞いの神事が行われたことが伝承されており、地域集落の共同祭祀の場としての意味合いも加わっていたのであろうことも考えられる。今はすべて中央自動車道の道路敷に変わり、池の畔の街道の傍らにあった、日月山華岳寺の16世住職道秀が建てた句碑の中の

古池や蛙飛び込む水の音 はせを（松尾芭蕉）

あがりてはさがりあけては夕雲雀 蓬二房（各務支考）

の二つの句に、在りし日の景観が偲ばれるだけである。なお蛇足ながら、後者の句の作者各務支考は、芭門十哲の人とされ、その門下は上野原地方に多くあり、砦跡近傍の日野原集落にある華岳寺（碑文では花岳寺）の16世は、句碑では「八峰」の号を用いているように芭翁の流れを汲む俳諧の関係者であったことが知られている。

第2節 長峰砦跡周辺の歴史的環境

長峰砦跡周辺の山間地に集落の形成を示す遺跡が確認されるのは縄文時代からである。砦跡の東、大門集落の南東に位置する大門遺跡群（大浜、南大浜、大門Ⅰ、大門Ⅱの4遺跡からなる）では、早期から後期にかけて何段階かの、また砦跡西方の野田尻Ⅰ遺跡、談合板遺跡では、中期の竪穴住居跡や関連遺構が検出されている。また、大門Ⅰ遺跡では、陥し穴と考えられる早期の土坑300基以上が検出されているが、このことは当時の中心的な生業としての自然環境を生かした狩猟が、ここで長期にわたって繰り返されてきたことを示している。今回の発掘調査においても、96-B区で石核が、98-B区で石錐が発見されているが、その背景としてこの砦跡のあたりも大門遺跡群のような撲点的な集落に生活する縄文人の狩猟エリアであったことが推測される。なお、地形的にも水田耕作にあまり適しないこの地域は、弥生時代以降は集落形成が減少するようだが、弥生時代の再葬墓が検出された南大浜遺跡や、最近になって横穴式石室が確認された矢坪地内の中ノ原古墳などの例もあるように、山間地での生活・文化的展開を示すような遺跡の存在も認められている。

奈良時代以降、山梨県東部地域は律令制下の行政区画においては甲斐国都留郡に編入される。しかし、甲斐・武藏・相模3国の国境地帯にあたり、峠越えの道や川筋を辿るむしろ東方との交通の方が利便であったため、政治的には東隣する武藏・相模の影響を受けやすい状況にあった。

平安末期、横山党の一派とされる古郡氏が武藏國からこの地に進出した。上野原市街地の南西、鶴川の断崖上に築かれた内城館はその居城であったとされる。建暦3（1213）年の古郡氏没落後は所領を継承した加藤氏が館主になっている。その他、上野原町内には松原館、沢殿屋敷などの居館があったことが伝えられるが、その所在地や由来については不明なところが多い。砦跡の東、大門集落の東北の段丘上にも居館があったことが、『甲斐国志』や都留市森島家所蔵の文化4（1807）年の『大門村絵図』により確認される。前者は古跡部で大門村に「館跡」の項を起こし

「カタイ沢」の西にあること、「古屋敷」の呼称があり主は庵形肥後守と伝承されていることを記している。また後者では、「勝た居沢」の西に「字肥後屋舎（敷）」の文字が見える。残念ながらその詳細や長峰砦との関わりを示す資料はない。なお「日本城郭大系」や「山梨県の中世城館跡」などでは、「大門館」の名称で扱われている。

戦国期、国境地帯の政情はきわめて不安定であったことが想像される。応永33（1426）年には武田信長追討のため関東公方足利持氏軍が鶴川から大槻（大月）まで進軍している。天明10（1478）年には長尾景春の反乱に乗じて加藤氏追討のため太田道灌の軍勢が鶴川付近に放火したという記録がある。「大門村絵図」にも示されている鷺ヶ崎の「古戦場」は、この鶴川攻めに関わるものと考えられている。また中世長峰の西端にあたる矢坂坂は、享禄3（1531）年、武田方（小山田信有軍）と北条氏綱軍が衝突した古戦場跡とされるところである。これらの行軍ルートは鶴川から仲間川に至る谷筋よりむしろ長峰の尾根筋を利用していることが推測される。

このように東方からの緊張關係に晒され、軍事・防衛上の要術であったこの地域で大きな役割を果たしたのは眺望のきく山頂や尾根に点在する山城群であったとみられる。長峰砦、大倉砦、小伏の城山、猪丸の城山（以上鶴川・仲間川筋）、鶴島御前山、折穴御前山、牧野砦、四方津御前山、綱之上御前山、斧薙御前山（以上相模川筋）などがその所在を知られているものである。前節でも記したように、長峰砦からは大倉山、四方津御前山を確認することができる。また、東方の眺望に優れている。この環境からは尾根伝いに東方から侵入する勢力に備えるとともに、大倉砦と連携をとりながら仲間川筋の情勢をつかみ、その情報を四方津御前山など後方の城砦に伝える役割に最も適した場所であろうと考えられる。これらの城砦の多くは詳細が明らかではないが、これまでの研究で、相互に有機的な繋がりを保ちながら、防衛・通信機能の一翼を担っていたと考えられている。

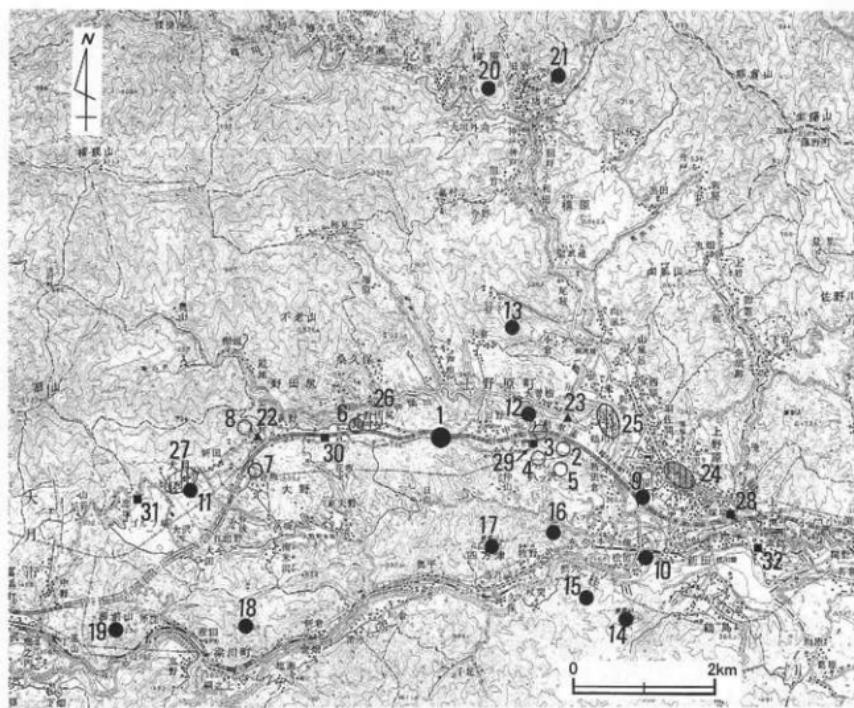
江戸時代になると、砦跡をかさめるように甲州街道（正式には甲州道中）が敷設される。尾根づたいの道が選ばれたことについては、水害の危険性がある桂川の川筋を避け、より安定した道筋を確保するためであったと考えられ、またすでに存在し使われていた尾根道を街道として新たに整備したという状況も推し量られる。当時のこの付近の宿駅は、上野原宿から西に向かって順に、鶴川、野田尻、犬目の3宿があり、その先は鳥沢宿（現大月市）に下る。また東から塚場、大門、荻野、恋塚の順に一里塚が設けられたが、このうち恋塚は塚山の原型が残存する貴重なものである。市街地東の諫訪には番所があった。

『甲斐国志』には街道沿いにあってすでに旧跡と認識されていた当時（江戸後期）の砦跡について「官道ノ傍少シ高キ地はナリ 上平地ニシテ北方ニ堀切ノ跡アリ」と記述があり、またこの地に「堀切」の跡の存在したことや、かつての城門の所在地とみられる地名「陣門」の存在が記されている。また「大門村絵図」では、砦の所在地に描かれた小峰は「城山」と記され、その北側には「殿の井戸」、東方に「濁り池」の文字が配されている。なお、「城山」、「陣門」は現在まで小字名として残ってきた。

この地を旅した江戸中期の儒学者荻生徂徠や同後期の文人谷文兆らが、砦跡のことやその付近の道中の風光明媚な様を紀行文の中に残している。さらに明治13（1880）年、明治天皇の諸藩府県御巡幸に供奉した池原香釋の紀行「美登毛能敷」には「機をわたれは鶴川駅也。うへは御板輿にめしかえさせ給ひぬ。こは所々に山坂あれは也とそ、すこしゆけは長峰という所にて、こゝは峰のいただきに路つけたり。……ゆきゆきて濁り池というあり。そのあたりをかしき松おぼく生て、けしき殊によし。とりてのあとあり。むかし武田氏の士、小山田某か築きしものなりとぞ」と書き記されているが、これによれば明治の初年になんとまだ街道のこの付近では車も通わず、天皇は輿を用いなければならぬ状況や砦の跡について小山田氏の築城との説があつたことなどが知られる。

明治時代も半ば頃から交通手段の近代化に伴い国道20号線（現甲州街道）、国鉄中央線などが順次開通した。その結果、旧街道沿いは急速に重要性を失い、宿駅などの周辺施設は衰退の途をたどることになった。街道の大半は明治以降改築・拡幅がすすみ、当時の痕跡をとどめない。野田尻集落の西や恋塚付近には、往時を偲ぶ古道がわずかに残り、敷石舗装の跡も見られるようである。今回の調査では、街道の一部に相当すると思われる道路状造構が、95-A区および98-B区で検出されている。

なお、長峰砦跡は昭和47年3月に町史跡の指定を受けている。その背景には中央自動車道建設工事により、長く名所旧跡として親しまれてきた砦跡の大半が削られてしまったことを惜しみ、道路南側の工事を免れた一画を史跡指定し、砦の歴史を保存・顕彰しようという経緯があった。平成8年7月、中央自動車道改築工事予定地に史跡指定地がとり込まれることになり、土壘や帶曲輪の跡とみられる遺構が残る道路北側への指定変更することなども検討されたが、諸般の事情からやむなく指定解除となり、今回の調査を通じての記録上の保存ということに至っている。



第2図 長峰砦跡の位置とその周辺

1 長峰砦跡

(周辺の遺跡)

- | | | | |
|----------|---------|---------|--------------------|
| 2 大浜遺跡 | 3 南大浜遺跡 | 4 大門Ⅰ遺跡 | 5 大門Ⅱ遺跡 (以上、大門遺跡群) |
| 6 野田尻Ⅰ遺跡 | 7 談合坂遺跡 | 8 西ノ原古墳 | |

(主な城砦)

- | | | | | |
|----------|----------|----------|-----------|-----------|
| 9 内城館 | 10 松宿館 | 11 沢殿館 | 12 大門館 | 13 大倉砦 |
| 14 鶴島御前山 | 15 楠穴御前山 | 16 牧野砦 | 17 四方津御前山 | 18 綱之上御前山 |
| 19 斧窪御前山 | 20 小伏の城山 | 21 猪丸の城山 | | |

(古戦場跡)

- | | |
|-----------|-----------|
| 22 矢坪坂古戦場 | 23 鳥ヶ崎古戦場 |
|-----------|-----------|

(甲州街道関係)

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|
| 24 上野原宿 | 25 鶴川宿 | 26 野田尻宿 | 27 犬目宿 | 28 塚場の一里塚 |
| 29 大門の一里塚 | 30 萩野の一里塚 | 31 恋塚の一里塚 | 32 諏訪の番所 | |

第3章 調査の成果 一発見された遺構と遺物一

第1節 第1次調査の成果

(1) 95-A区の概要(第4図1)

95-A区は、調査区全体の東部、標高367m前後を測る、尾根の鞍部に位置する。ここでの調査では尾根頂部の長さ約80m、幅約7mの範囲と尾根北斜面及び西斜面のトレンチにおいて遺構確認作業を実施した。南斜面は崖状を呈し、危険なため十分な遺構確認を行うことができなかった。

① 基本層序(第4図2)

尾根頂部の層序は表土層から基盤層(岩盤)まで7層に分層され、遺構確認面は第5層上面である。表土層から第4層までは西側から東側にかけて徐々に厚く堆積する状況が確認された。また尾根南斜面は現況より深く開折している状況も捉えられた。

② 発見された遺構と遺物

発見された遺構は尾根頂部の土坑1基、北斜面の道路状遺構1条である。遺物は出土していない。

1号土坑(第4図7)

調査区西側のC-4グリッドに位置する。形状は楕円形を呈し、規模は長軸2.74m、短軸1.1m、深さ16cmを測る。覆土は4層に分けられ、2・3層中に焼土・炭化材が多く見られ、特に底部付近の中央やや西よりからは3箇所に集中して検出された。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

道路状遺構(第4図4~6)

尾根頂部より北斜面を約8m程下がった地点に旧甲州街道とされる平坦部が見られ、トレンチにより覆土の堆積状況の確認を行った。いずれも10cm程の表土(腐植土)のみの單一層であり、表土直下の路面は非常に堅くしまっていた。調査区内で確認された規模は長さ約80m、幅1mを測り、東西方向の比高差4.5mで、西側へ傾斜している。

(2) 95-B区の概要(第3図)

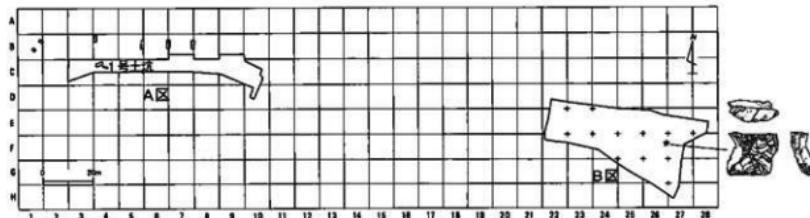
95-B区は調査区全体の最東端部の現中央道脇に位置し、標高約337mを測る。調査は重機による表土剥ぎ後、遺構確認作業を進めた。この結果、現表土下は岩盤の直上まで各土層であり、遺構の検出にはいたらなかった。遺物は表土層より石器が出土したのみで、本地点での跡の存在を確認することはできなかった。

石器(第4図8)

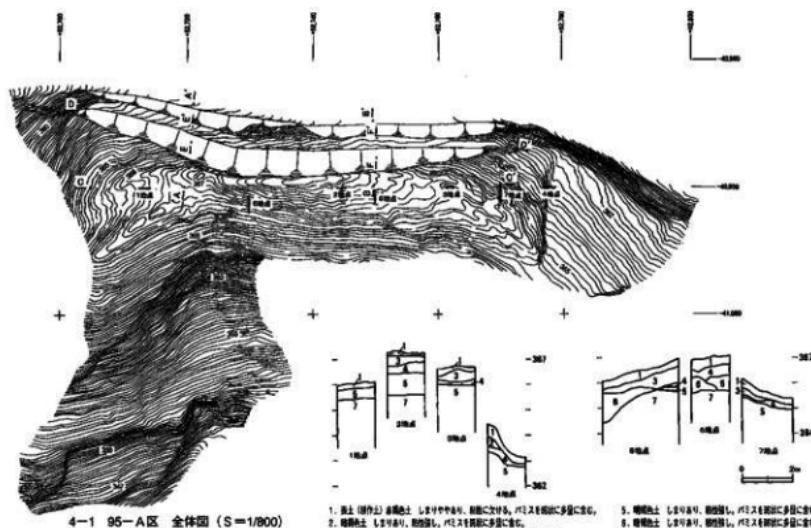
黒曜石製の石核1点が出土している。平坦な蝶面を打面とし、剥離作業は平坦な打面とこれに対抗する部位から行われている。時期は縄文時代に比定される。

(3) 第1次調査のまとめ

1995年度の第1次調査では、土坑1基、道路状遺構1条が95-A区で検出された。土坑については時期不明であるが、覆土内における焼土、炭化材の検出状況より、他の場所で燃焼された材などの炭化物が廃棄されたものと考えられる。道路状遺構は旧甲州街道と周知されたものであり、硬化した路面より、人々の行き交う姿が思い起こされる。



第3図 第1次調査の調査区配置図



1. 黄土(褐色土) しりりあり、堅硬であり、バクス瓦頭に多く存在。
2. 黄褐色土 しりりあり、堅硬であり、バクス瓦頭に多く存在。
3. 黄褐色土 しりりあり、堅硬であり、瓦頭に多く存在。
4. 黄褐色土 しりりあり、堅硬であり、バクス瓦頭に多く存在。
5. 塗膜土 しりりあり、堅硬し、バクス瓦頭に多く存在。
6. 黄褐色土 しりりあり、堅硬し、バクス瓦頭に多く存在。
7. 黄土

4-2 95-A区 基本層序

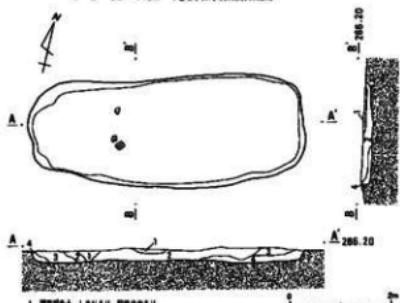
4-3 95-A区 尾根頂部断面図

4-4 95-A区 道路状溝横断面図

4-5 95-A区 尾根北斜面断面図

1. 黄土(褐色土) しりりあり、堅硬であり、バクス瓦頭に多く存在。

4-6 95-A区 道路状溝横断面図



1. 塗膜土 しりりあり、堅硬であり。
2. 黄褐色土 しりりあり、堅硬であり、カーボン、鐵土を含む。
3. 黄褐色土 しりりあり、堅硬であり、カーボン、鐵土、銅鉱石を含む。
4. 黄土 しりりあり、堅硬。



第4図 第1次調査の遺構と遺物

第2節 第2次調査の成果

第2次調査における調査区は、中央自動車道拡幅工事の中でのショートカット区間内の長さ約700m、幅40mほどの範囲で、第1次調査の95-A区を挟んで、東側を97-A区、西側を97-B区と仮称した。ここでは、古くから丸山と呼ばれていた97-A区を中心に、土壘状遺構、及び、帯曲輪状のテラス面などの遺構確認と航空測量図の作成などの調査作業を行った。

(1) 97-A区の概要

97-A区は、第2次の調査区のうち、比較的遺構のある可能性が期待されていた部分である。標高は342~366mを測る。調査は、調査区の全体が山林であったため、工事関係者の協力を得ての樹木の伐採から始まった。

① 発見された遺構

伐採終了後、丸山と呼ばれるその地形の頂上には、北西~南東方向に不整形に広がる平坦面がみられ、その南東側には緩やかなテラスが形成されていた。頂上の平坦面の南東隅には、東を向いて開口するコの字型の土壘状遺構があり、この平坦面に見られた土壘状遺構と南東斜面のテラスを中心に調査を進めた。平坦面では、腐植土が10cmほど堆積しており、これを取り除くと地山が露出する状態であった。

土壘状遺構（第7図）

丸山の頂上の平坦面に確認された土壘状遺構は、調査以前には地域の信仰対象である「お稻荷さん」（丸山稻荷）が祭られており、東側斜面から参道として階段が設置されていた。この遺構は、いつの頃からつくられたのかは不明であるが、コの字型の土壘状の高まりに対し、トレンチを南、北、西の各辺に入れ、土層観察を行った結果、地山を切り開き、掘った土を若干積みあげて人為的に作られたものと考えられる。

トレンチ内の本来の地山と思われる部分には、焼土化した土壤と炭化材が検出された。これは、いつの時期にか火災にあったもののほか、もともと、「お稻荷さん」あるいはそれなりの信仰対象物を祭るために地鎮祭的な所作によるもののかはわかつてはいない。

また、コの字状に囲まれた内側には、一間半四方に配置された礎石が検出された。この礎石も、「お稻荷さん」の石の祠を覆うお堂のような建物があったことを示唆している。

帯曲輪状のテラス面（第6図）

平坦面から南東に傾斜するテラスでは、長峰砦の東側の出構え等に相当する遺構の存在が想定されたものの、柱穴などの遺構は確認されなかった。表土としての腐植土を取り除くと、そこは地山となってしまった。

② 出土遺物

遺物は、その大半が、土壘状遺構周辺からの出土である。

瓦類（第9~13図）

瓦は、遺構の北側に入れたトレンチを外側に延長して掘り下げたところ折り重なるように確認された。腐植土の下、数cmほどである。出土の範囲は第7図に示した。その種類は、棟瓦の平瓦・軒瓦などがほとんどだが、鬼瓦や道具瓦・飾り瓦も出土している。棟瓦の軒瓦などに付つけられた飾りの意匠は、類例を知らないがおそらく擬宝珠を現したものと思われる。また刻印の見られる資料も3点ほど確認された。

陶磁器類（第14図）

陶磁器類は、瓦類と一緒に出土しており、点数は少ない。茶碗や灯明皿など、「お稻荷さん」への供えに関係したものと考えられる。

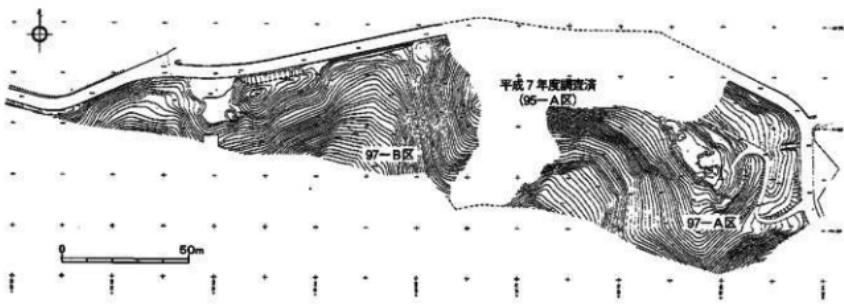
錢貨（第14図）

錢貨は、寛永通寶、文久永寶といった江戸期のものを主とし、近代のものが若干見られた。寛永通寶については、すべて「一文銭」で、鉄銭と銅銭が出土しているが、銅銭が多い。

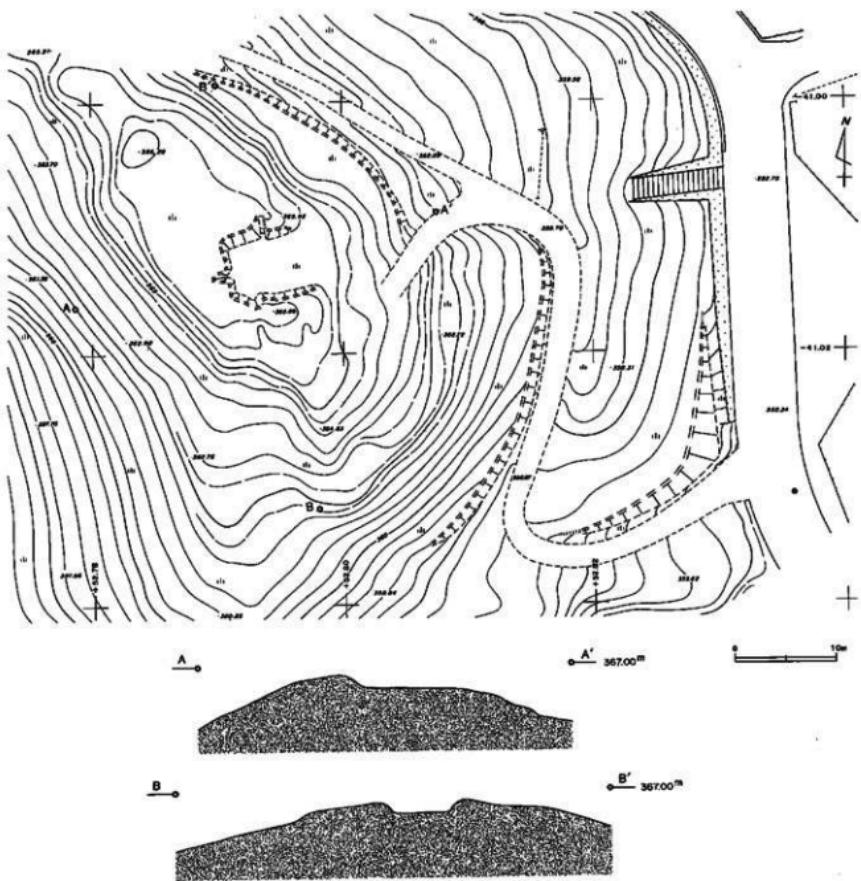
(2) 97-B区の概要

97-B区は、97-A区とは95-A区を挟んで東西の位置関係にある。尾根の南斜面は急で、南側にあるゴルフ場まで一気に下る。西側斜面の途中には、長峰の句碑が立っていた。しかし、尾根の頂上を中心周囲全体が急斜面で、遺構の作られた形跡が見られなかった。また北斜面には、本来95-A区で確認された旧甲州街道が続いているとも考えられるが、舗装された車道（旧甲州街道を踏襲した町道）をつくる際にでも、削られてしまったのであろうか、その延長と思しきものは確認されなかった。この車道より北には中央自動車道が走っている。

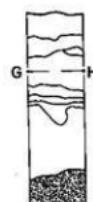
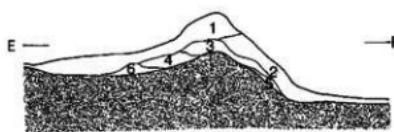
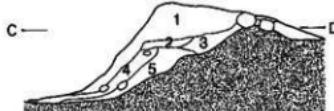
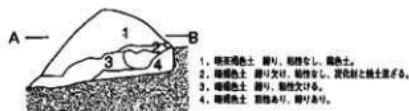
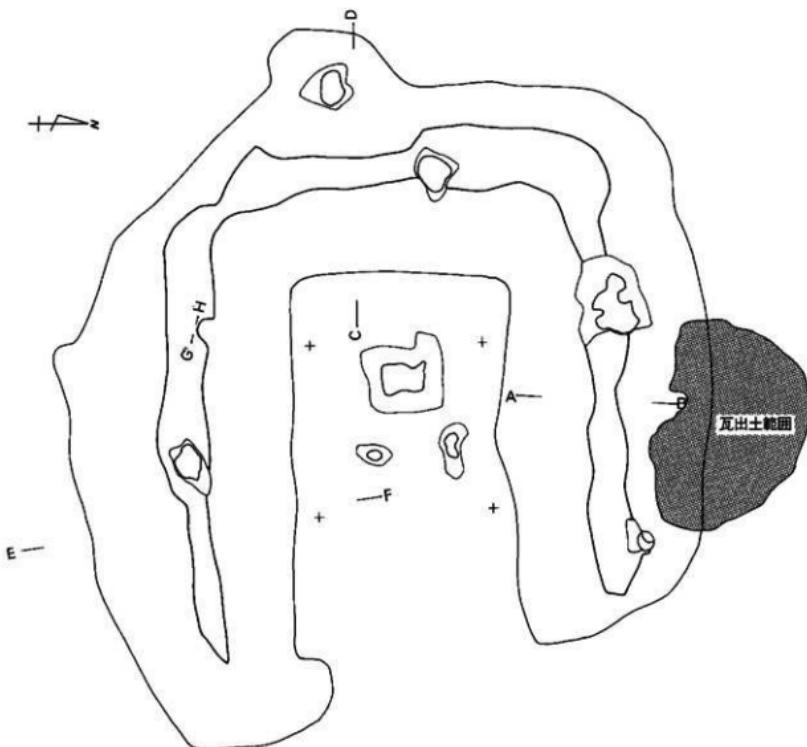
この調査区からは遺物などの出土もなかった。以上に見たような状況のため、発掘調査作業自体は、調査対象地域の地形を全体測量図の作成の中に取り込むにとどまつた。砦本体と考えられる西側の尾根（98-A区）とのつながりの中で、砦を広い視野で観察する上で意味を持つ区域であると思われる。



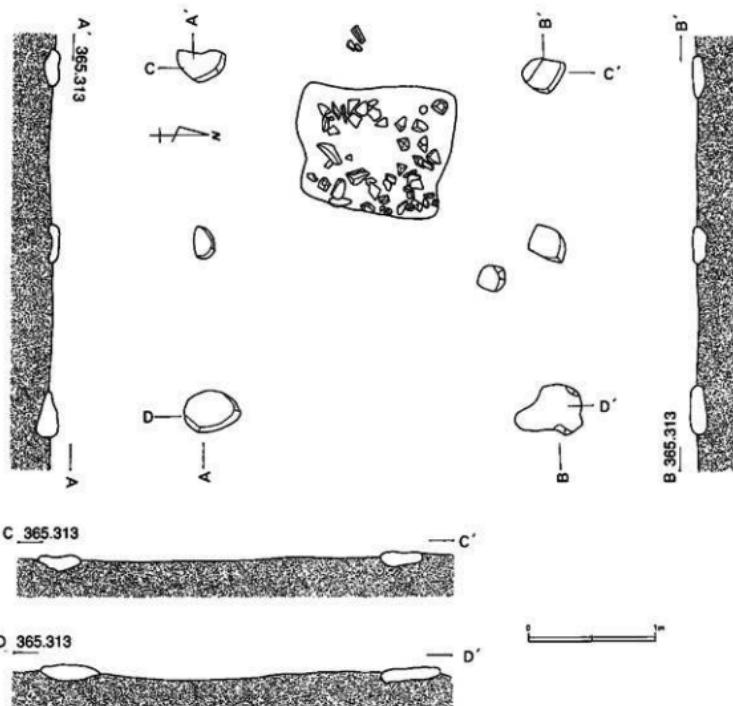
第5図 第2次調査の調査区全体図



第6図 97-A区主要部



第7図 97-A区 丸山稻荷周辺の造構

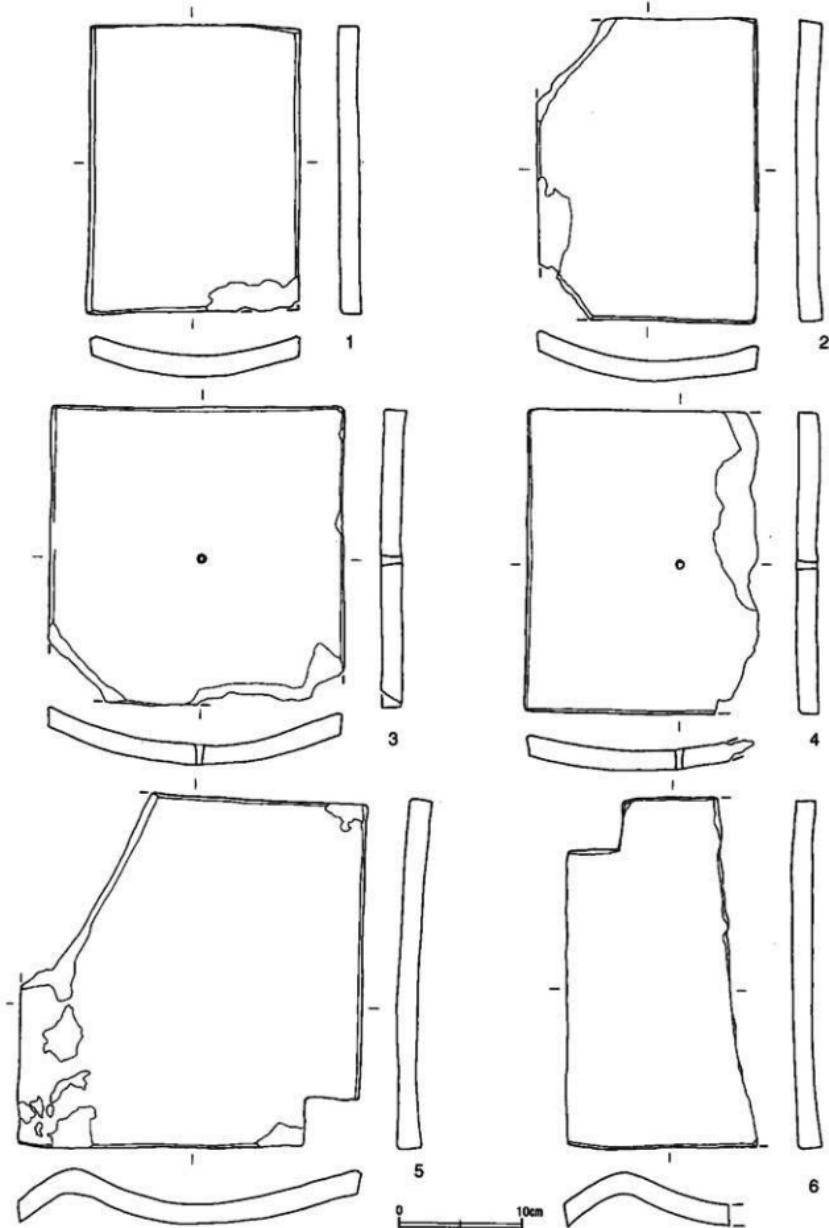


第8図 97-A区 丸山稲荷関連の建物遺構

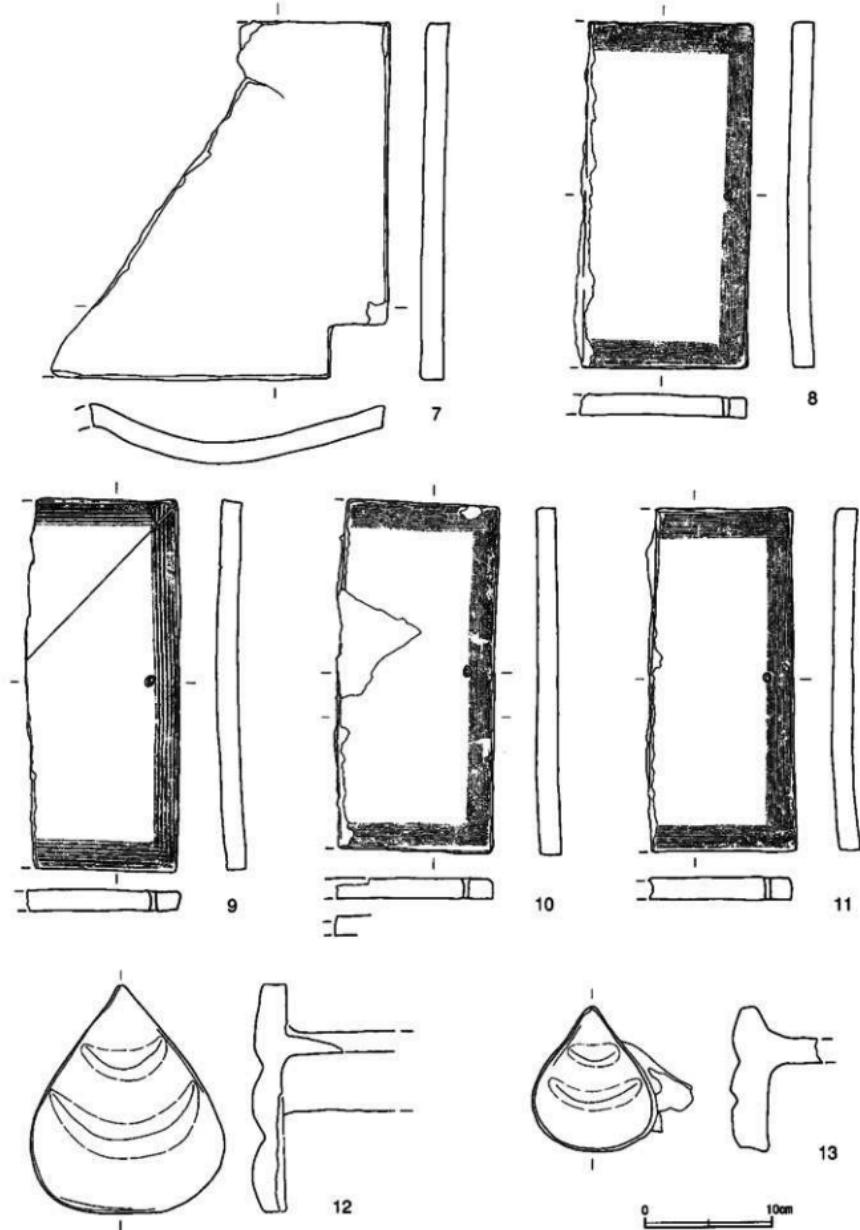
(4) 第2次調査のまとめ

1997年度の第2次調査では、以上のように、長峰砦の築造年代である戦国期の遺構は検出されなかったが、丸山の頂上の平坦面の土壘状遺構とその南東斜面のテラス面などが確認された。土壘状遺構の内側には、移転した丸山稲荷のものと思われる一間半四方に配置された礎石や瓦、さらに寛永通寶など近世から近代にかけての錢貨や陶磁器片が検出された。

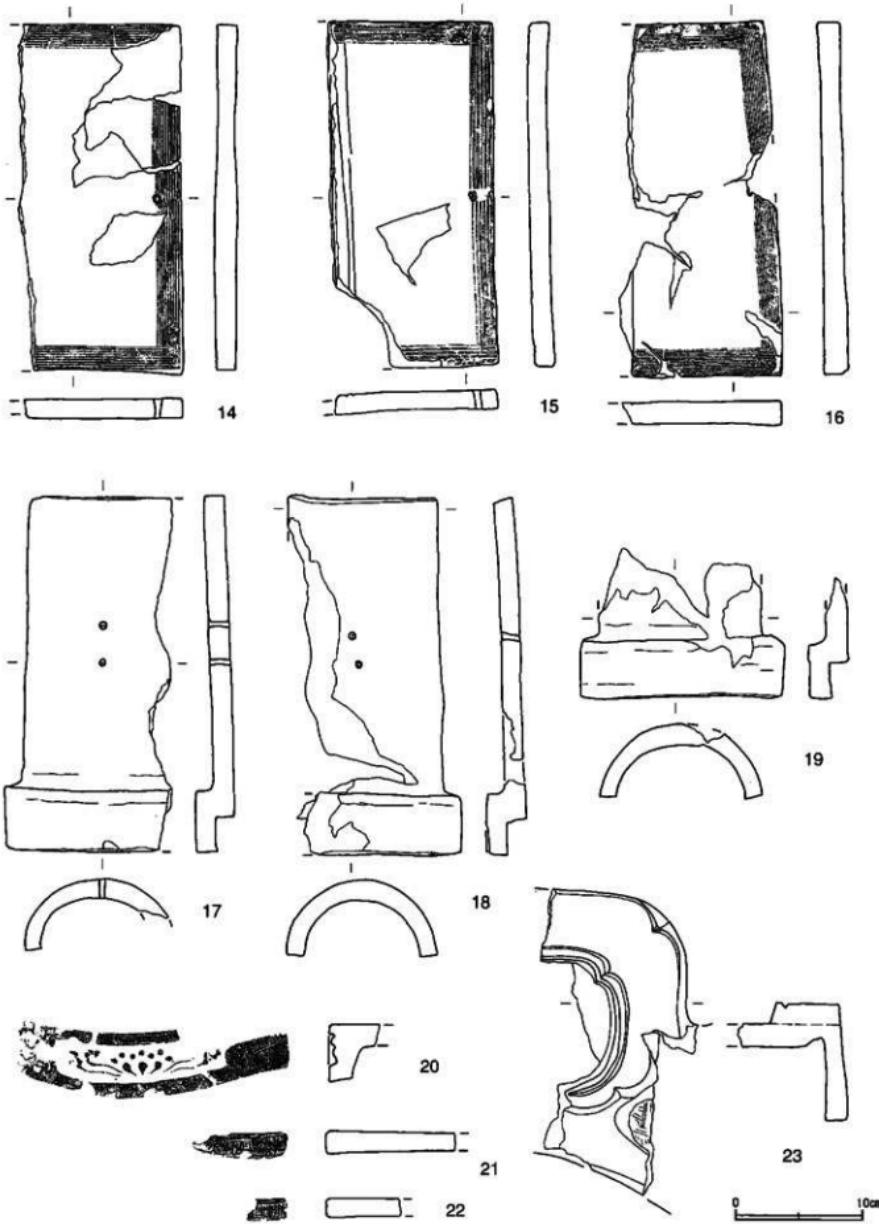
寛永通寶は、江戸時代に作られ、流通した貨幣であるが、明治期になってもなおしばらくは通用していたともいわれ、時期の特定には参考にしかならない。おそらく「お稲荷さん」へのお賽銭と思われる。多くが土壘状遺構の周辺から出土していた。これらの遺物の状態から、この土壘状遺構は古くても江戸時代末頃から明治前半の頃に作られたのではないかと思われる。



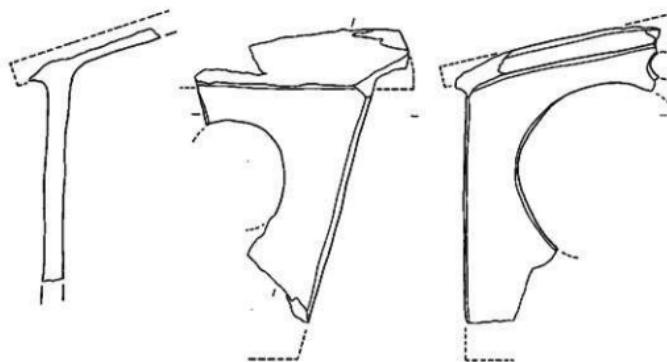
第9図 97-A区 出土遺物(1)



第10図 97-A区 出土遺物(2)



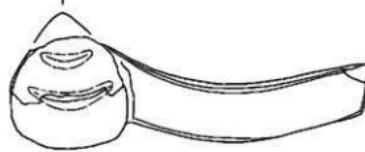
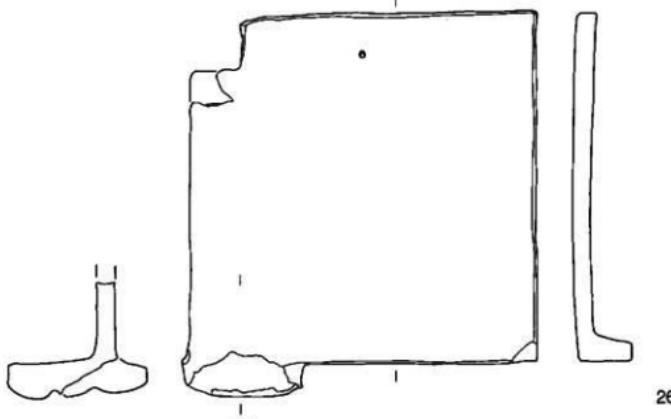
第11図 97-A区 出土遺物(3)



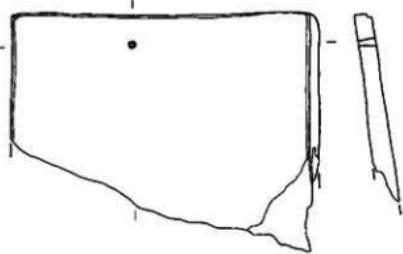
24

25

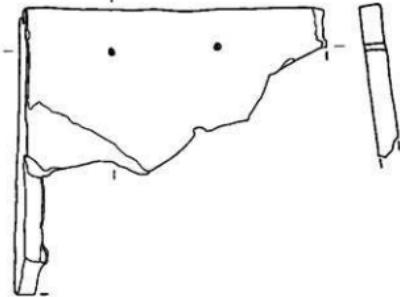
26



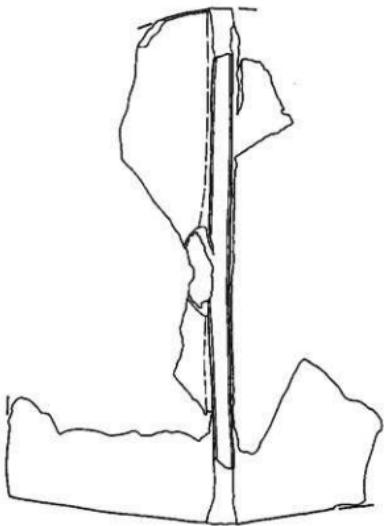
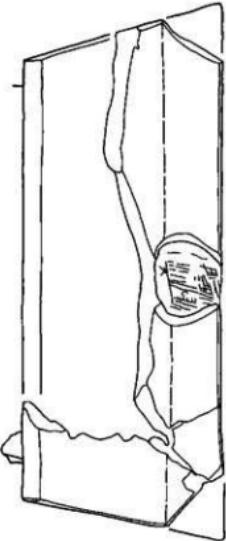
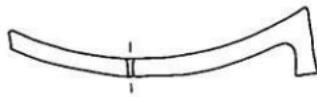
第12図 97-A区 出土遺物 (4)



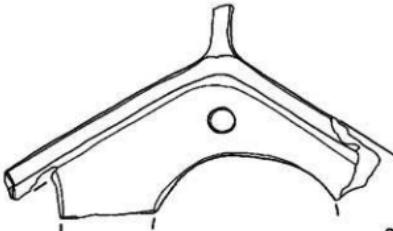
27



28

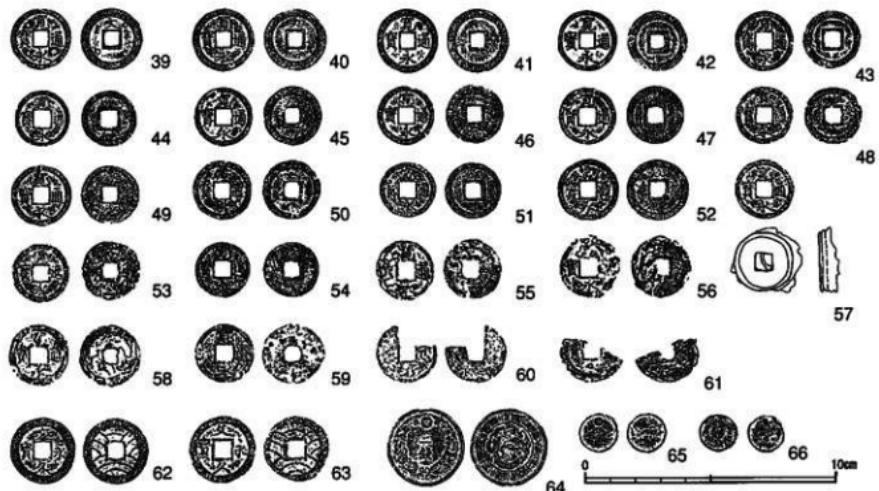
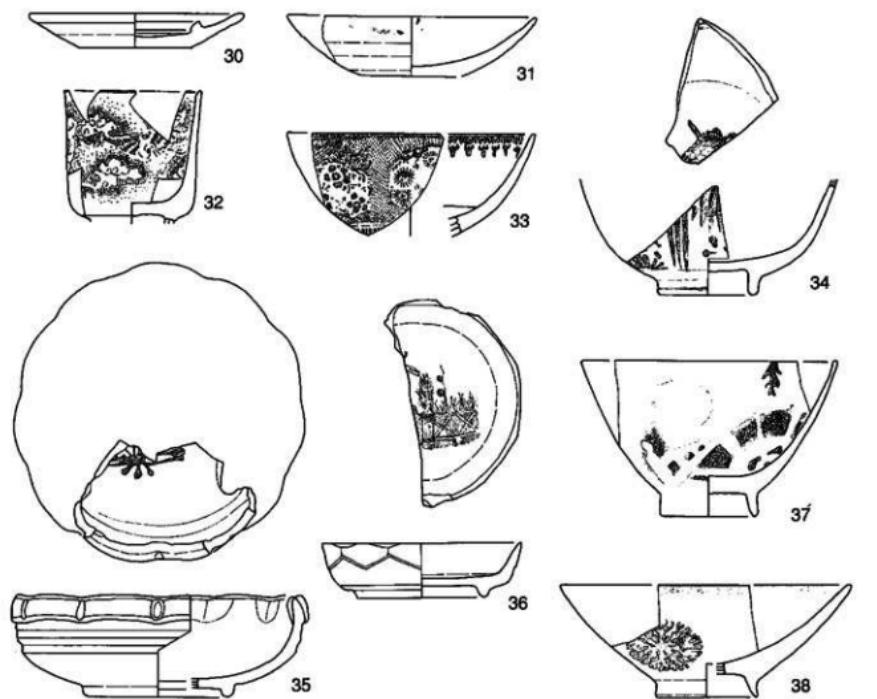


0 10cm



29

第13図 97-A区 出土遺物 (5)



第14図 97-A区 出土遺物 (6)

第3節 第3次調査の成果

第3次調査は、調査対象地全体の中ではほぼその西側半分に相当する。拡幅前の中央自動車道と旧甲州街道を踏襲した町道に挟まれた、東西延長400m、南北の幅50mの細長い調査区で、その中ほどに鉄工場が造成されており、その間90mほどは遺構の見られない状況になっていた。このため鉄工場をおいて東側を98-A区、西側を98-B区として、それぞれについて調査を実施した。第3次の実際の発掘調査面積は、98-A・B区合わせて9,000m²となっている。

(1) 98-A区の概要（第15図）

98-A区は、調査前から砦跡の中心部に相当するところと目されていたところで、付近の小字名は城山であり、上野原町教育委員会が昭和47年3月に「長峰の史跡」の名称で史跡指定を行っていた区域（上野原町大門字城山1143）もこの中に所在していた。調査前の地目は山林で、下草が一段と繁茂しており、その時点での遺構の把握は困難であった。

① 確認された遺構

伐開後は、標高373mほど最高所の郭を中心に、東側に2つの郭と壠状の個所が視認され、最高所の郭を郭1、一段下がった東側を郭2、壠状の地形を越えてさらに東側を郭3と仮称した。また郭1の北側斜面には6mほど下がったところに帯郭状の小段が見られ郭1の北側テラスと仮称して調査にかかった。なお、調査の進展の中で、郭2—郭3の間の壠状地形は堀切跡、郭1北側テラスは横堀跡としての実態が明らかになり、以下この名称で報告する。

郭1（第16図）

98-A区にあって現状で最も標高の高いところで、中央自動車道等による後世の影響を加味しても、おそらく主郭に相当するものと判断される。東西に長い方形の平面をもち、東西に0.7m前後の高さの土壘状の高まりをもつ。この郭に設定したトレンチの土層観察によれば、地表下10cm足らずで地山となり、郭及び東西の土壘状の高まりの形成は削り出しによるものと判断される。西側の土壘状の先は、高まりをやや下がりはじめたところから鉄工場の敷地となり、その造成工事により削り取りられている。東側土壘状の先は急崖となり、一段下がって郭2につながるが、その状況も現代になっての改変を受けた結果によるものと思われる。北面は旧状を残し、石垣風の旁開気をもたらす貼り石が部分的に見られる。南辺は不規則な状況になっているが、砦の立地するこの場所では至る所に大小の規模の地滑り地形が見られ、郭1の南辺も地滑りの影響によっているもので、当初はもう少し南側に広がりを持ち、腰郭など配していた可能性も推察される。

郭内は東西15m、南北7m前後にほぼ平坦で、表土下数cmの地山直上で遺構確認を行ったが、柱穴等の何らかの施設の存在は確認されなかった。遺物は、地山に近いところで、キセルの吸口部1点、寛永通寶3点、文久永寶1点など、いずれも近世のものであった。

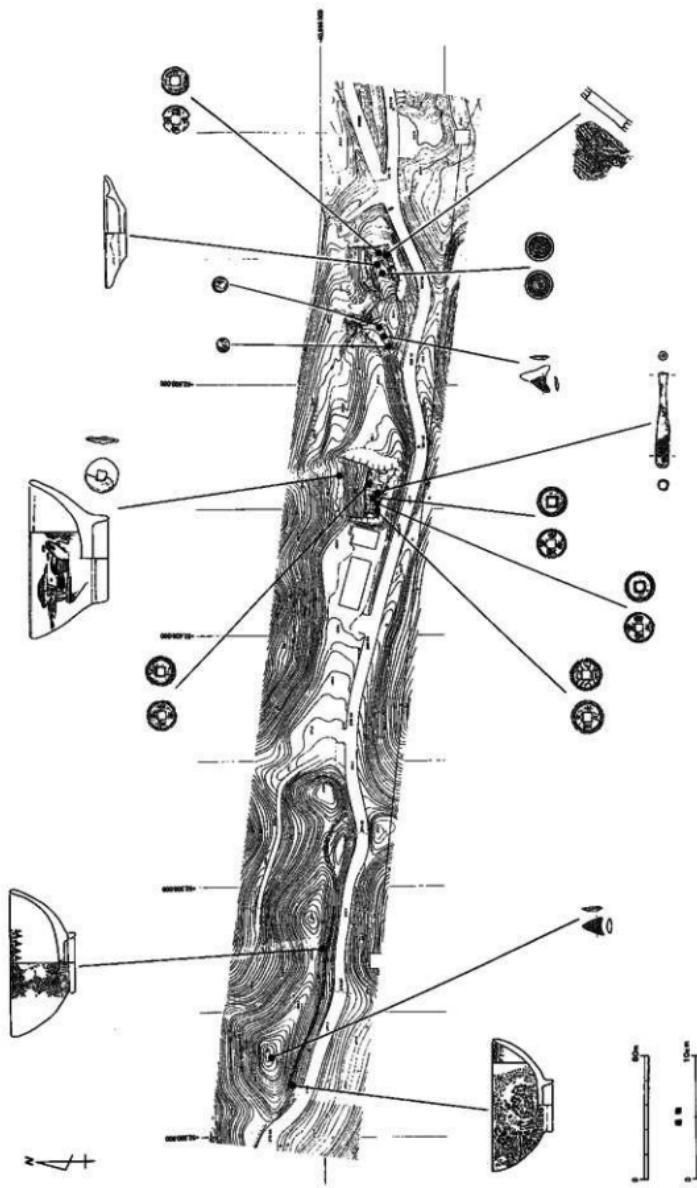
郭2（第16図）

郭2は、郭1の東側に位置し、接続部では最大で7mほど標高差がある。東西40m、南北7~8mの狭長なもので、北辺は中央自動車道1期工事の造成法面となる。南辺は、郭1と同様、本来の形状をとどめているか疑問とされる状況にある。東側は、後で触れる堀切の遺構となる。郭内は西から東に向かって緩やかに下がる平坦面で、これも数cm厚の表土の下は地山となり、平坦面において建物・柵など想定したものの、遺構も遺物も確認されなかった。ここまで全体を郭2として扱ったが、郭2の現状がそのまま歴史的な遺構といえるか、調査の途中から疑惑が生じた。というのは、郭1から下がる、斜度40°近い高低差7mの法面は他の県内の中世城郭の中には例を見ないもので、事前に道路公団側から当該個所は拡幅前においては公団用地外であるため工事の手が入るところではないと説明は受けていたものの、あらためて法面の精査を進めたところ重機の掘削により形成されたと思われる状況が認められるに至った。問題の法面は、精査終了後から小規模な地滑りを起こし始めるほどであり、最初の中央自動車道工事の際、道路隣接地の地盤の安定確保のため、民地にもかかわらず一定の理解の元に掘削が及んだのではないかとの推測が生まれた。中央自動車道1期工事の線形調査用に作成された地形図と郭1との間の法面の観察所見などを合わせ見ると、結論的には、第16図の推定線のような地形であったものと思われ、東端の堀切に面した部分のみに旧地形を残すと見られる。

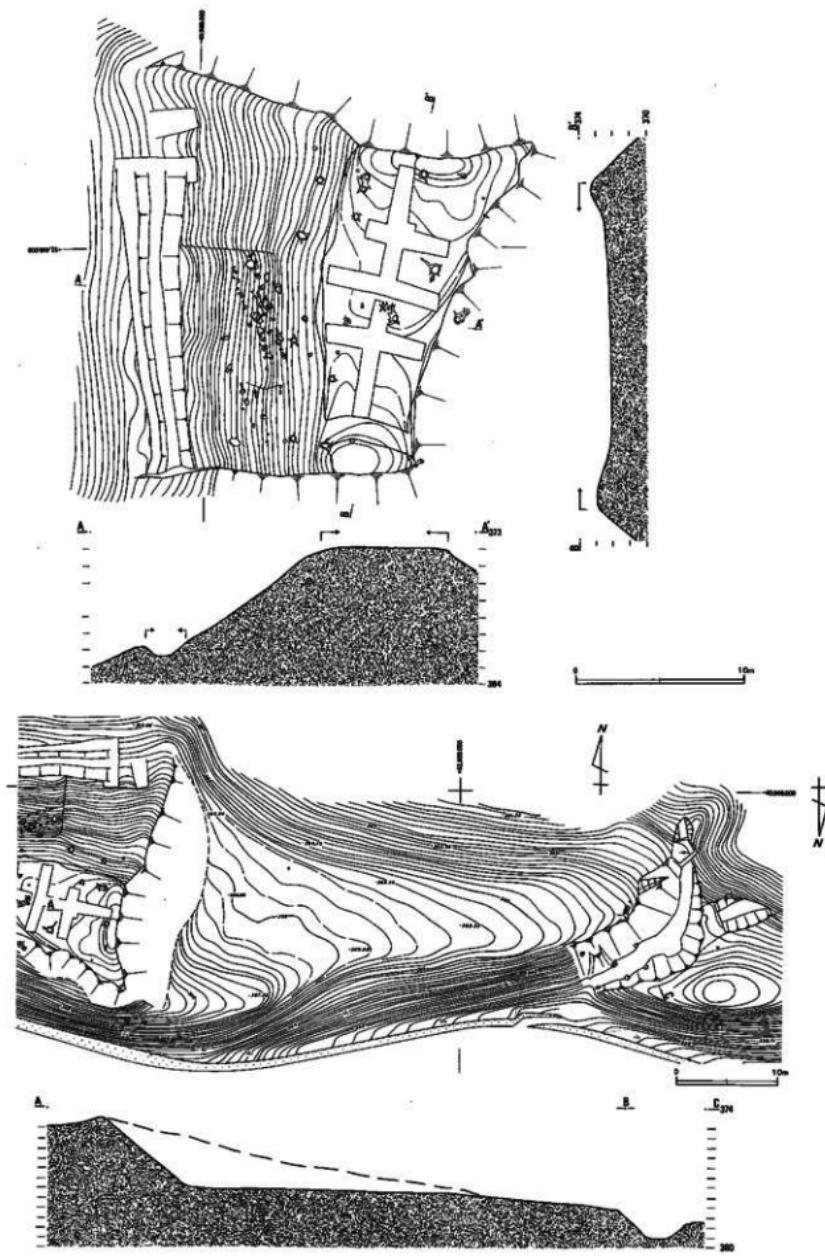
郭3（第17図）

郭2の堀切を越えて東に位置する。東西17~18m、南北8mで、緩やかに東に下がる平坦面である。地元の方の話によれば昭和のある時期まで畑になっていたこともあるとのことであったが、調査着手時には山林に帰っていた。畑であったこともあってか、表土は比較的厚く、他で見られる腐植土の下に耕作土的な堆積も見られた。郭3の北側は自然な斜面で、東と南は地滑り等の影響を受けた崩落の見られる状況となる。

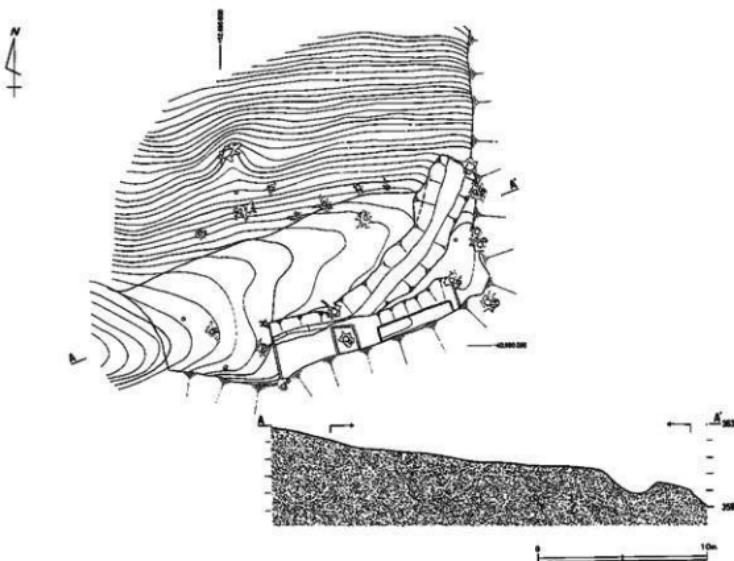
この郭3では、郭内に2つの遺構が確認されている。一つはこの郭の南辺に沿うように見られたもので、南辺西よりに深さ1m弱の枠状の掘り込みがあり、これから東へ溝状の落ち込みが続くもので、時代を特定する遺物は見られないが、砦の時期よりは新しいものと考えられる。電柱の支柱があり西限を確認できなかったり、また南側の広がり



第15図 第3次調査の調査区全体と主要出土遺物の分布



第16図 98-A区 部1・横堀路および部2



第17図 98-A区 郭3

と東側延長は崩落により失われていたりで、十分に性格を把握するに至らなかった。

二つの造構は、溝状造構で、南側から弓なりに北へ郭内を横断している。幅2.5m前後、深さ0.7mほどで、小規模な堀のようにも見られるものであった。南側では先に見た樹状の造構と切り合ひ関係をもち、それに先行するものであることが確認されている。覆土内には大小の礫が見られた。溝状造構の底は南側から北に向かって次第に低くなっているが、水路のように恒常的に水の流れた状況は観察されない。覆土の下部よりから中世の土器片と混入品の繩文土器片が見られたがいざれも図示不能な小片であった。また覆土のやや上部からは北宋銭の政和通寶（初鋤1111年）が1点出土している。時期的には郭3に伴うかやや新しいものと見られ、こうした状況から、郭3との関係やそれ自体の性格は明確にし得ないが、中世末ないし近世初頭の造構であると考えられる。

郭3内の平坦面は、耕作が行われていた時期の影響もあるが、建物等の造構は確認されなかつた。また耕作時に混入したと見られる近世ないし近代の陶磁器片や昭和の一銭硬貨なども散見されたが、それらに混じって、平安時代頃と見られる須恵器片や甲斐型土器と見られる土師器の小片も確認されている。

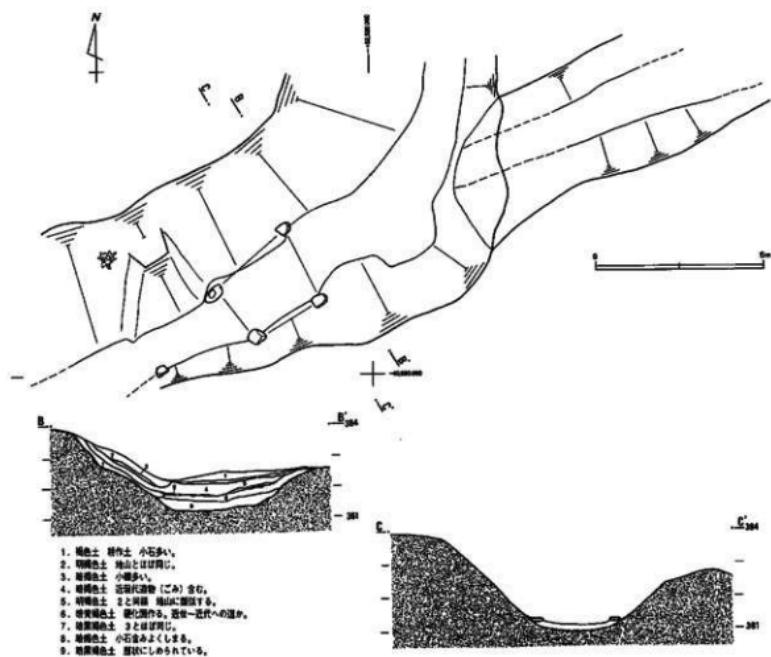
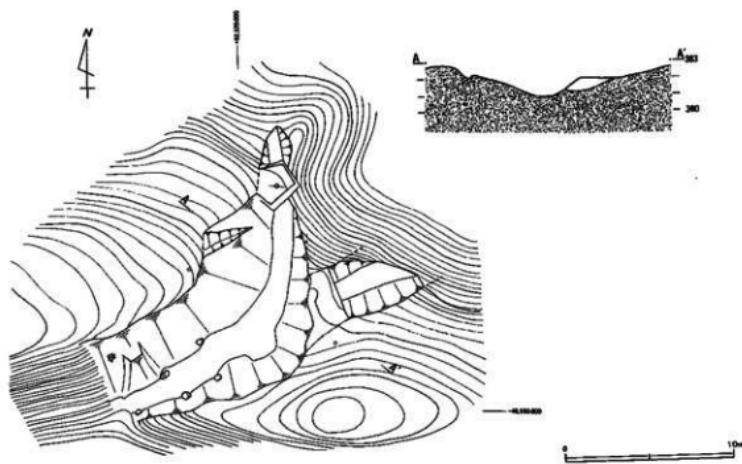
堀切跡（第18図）

第2と郭3の間に位置する。最大幅8m、延長20mほどの、三日月型の平面形をした尾根切りの空堀である。堀底までの深さは、郭2側からは3m前後、郭3側からは約2mとなっている。堀底の幅は平均的には1.2m、中央部のやや広がったところで2.5mほどである。

この堀切は、ほぼ中央で屈曲し、三日月型になっているが、この屈曲部の北側で、地山面は深い谷状になっていた。それが堀切が構築された頃には、ほぼ埋まりきって浅い谷状地形に変わった状況が見られた。堀切はこの深い谷状地形につながることなく、それをよけるようにして折れ曲がり、北側のごく小さな尾根を切るように作られていることが注意される。地山を削って作られた堀底は、水が溜まったような形跡は認められず、空堀で、堀底道として使われていたと想定される。堀切が屈曲しているのは、その延長上の何らかの施設を結ぶ必要性から来ているのかもしれない。

堀切の郭2側の法面の南よりには、法面中ほどから下を、地山を削り残してせり出した部分が見られた。またその北側には法面に貼り石を施しているような状況が見られ、この2点を合わせると、堀底道に対しての門あるいは木戸のようなものが置かれていた可能性があると思われる。なお堀切の郭2側の法面の北寄り部分には地滑りによる地割れのような変形箇所が認められた。

この堀切は、調査前にはだいぶ埋まっていて、郭2と郭3の間の鞍部のような状況にあった。堀底までの堆積土は



第18図 98-A区 堤切跡

1.2m程度になっていた。堆積土層の観察の結果、屈曲部より南側では、堀底から20cmくらいのところまでは近世初頭ごろまでにすでに埋まっており、この上面は道路として利用されていた状況が読み取れ、これに対し屈曲部から北側はこの段階でほとんど埋められていたと見られる。さらに堀切中央部での観察では、10数cmの盛り土・版築を行ったうえで道路の改修をした状況が見られるが、堀切南端部では数cmおきに5面ほど硬面が確認され、その道路は長期にわたって修繕されながら維持されたと推定される。また南半部が現状まで埋まつたのは、明治以降のかなり新しい段階と見られる。

堀切の中に確認された堀切より新しい時代の道路は、堀切の屈曲部で堀切の壁を突き抜け、真っ直ぐに進んで、浅い谷状地形を東の方へ向かっていく状況も確認されているが、また一方南半部では3つの礎石と1つの礎石抜取り穴（あるいは柱穴）が存在したが、礎石上面は皆ほぼ同レベルで、堀底からは完全に浮いており、砦の造構としての堀切ではなく、江戸期になってつくられた初期の道路上に作られたものと見られる。道路に関係した礎石建ちの門のような施設の存在が推測され、それは先に触れた砦の時代の堀底における門ないし木戸の存在を踏襲したものとまでいえるかもしれない。

この堀切跡での遺物は、鉄砲玉2点と、堆積土上部の層からの近現代の陶磁器片などであった。

横堀跡（第16図）

郭1の北側斜面の中間に確認されたもので、斜面に対し横方向に延長18mを検出した。西側の続きは鉄工場の敷地内に入り、それ以上の確認ができなかった。また東側の終わりは、当初そこが堅堀状になりそれに接続するかのようにも思われたが、地滑りの影響を受けて土層の堆積が乱れており、明確にとらえることはできなかった。

この横堀は、調査着手時には完全に埋没していて、表面上は幅3mほどの帯状のテラス面としか見えず、横堀跡とは予想されない状況であった。數箇所にトレンチを設定しての確認作業の中で、堀の存在に気付いたところである。確認された堀幅は約2.5m、深さは0.5mを測る。

横堀跡からの出土遺物は、西端付近の第1側法面で土師質土器の図示するまでに至らない細片が見られたのと、やや東寄りの堀底の中ほどに陶器の染付け碗と鉄錢の欠損品が伴って検出されたのみである。

この横堀は、構造的には砦にかかる一連の造構の一つで、後者の遺物の出土状況から江戸時代後期ごろまでは築造当初の姿を伝えていたが、その後に調査前の状況まで埋まつたものと考えられる。

② 出土遺物

これまでの造構説明の中で、98-A区内の各造構ごとの遺物のあり方についてはその都度略述してきたが、ここでは図示することが可能な遺物について、以下に種別に報告する。

陶磁器類（第19図1～3）

1は、横堀跡の底部から出土した。陶器と磁器の中間的な様相の染付け碗である。口径12.5cm、高台径6.7cm、高さ6.3cmを測り、高台が大き目で安定感がある広東形の器形となっている。淡黄色（5Y8/3）の胎土は粗目で小さな間隙が目立ち、釉には挿入が顕著。外面には手描きで藍色のやや淡い山水文を描き、見込みには二重の圈線の中に中心よりやや偏して五弁花文をおく。江戸後期の所産と見られる。同図12の鉄錢が伴出した。

2は、陶製の灯明受け皿で、郭3の平坦面より出土した。口径8.9cm、底径3.6cm、高さ1.7cmで、内面と外表面は口縁部下まで長石釉を施す。胎土は灰白色（5Y8/3）で緻密。器外面に重ね焼きの痕跡を残す。江戸後期か。

3は、須恵器の壺の小破片と見られるもので、郭3内より出土している。灰色（5Y5/1）を呈し、外表面には叩き目が残り、内面はナデが施されている。他に図化し得ないが甲斐型土器と見られる細片もあるので、年代的には平安時代を考えたい。

石器（第19図7）

7は、堀切跡の上部堆積土の中から採集された黒曜石製の石鎚の欠損品である。残存長1.5cm。次節で報告される石材の産地推定分析によると伊豆神津島産と見られ、付近が繩文時代の狩り場であったことをうかがわせるものといえる。

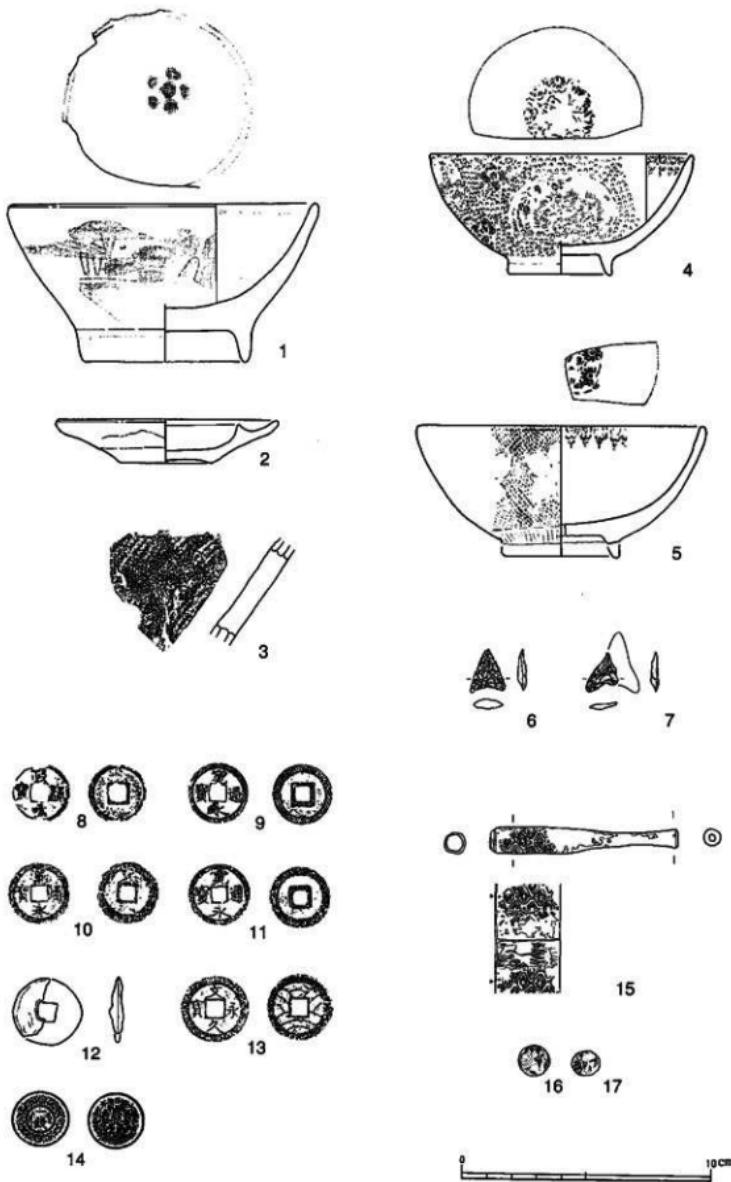
金属製品（第19図8～17）

98-A区内で出土した金属製品には、錢貨（8～14）、煙管（15）、鉄砲玉（16・17）などがある。

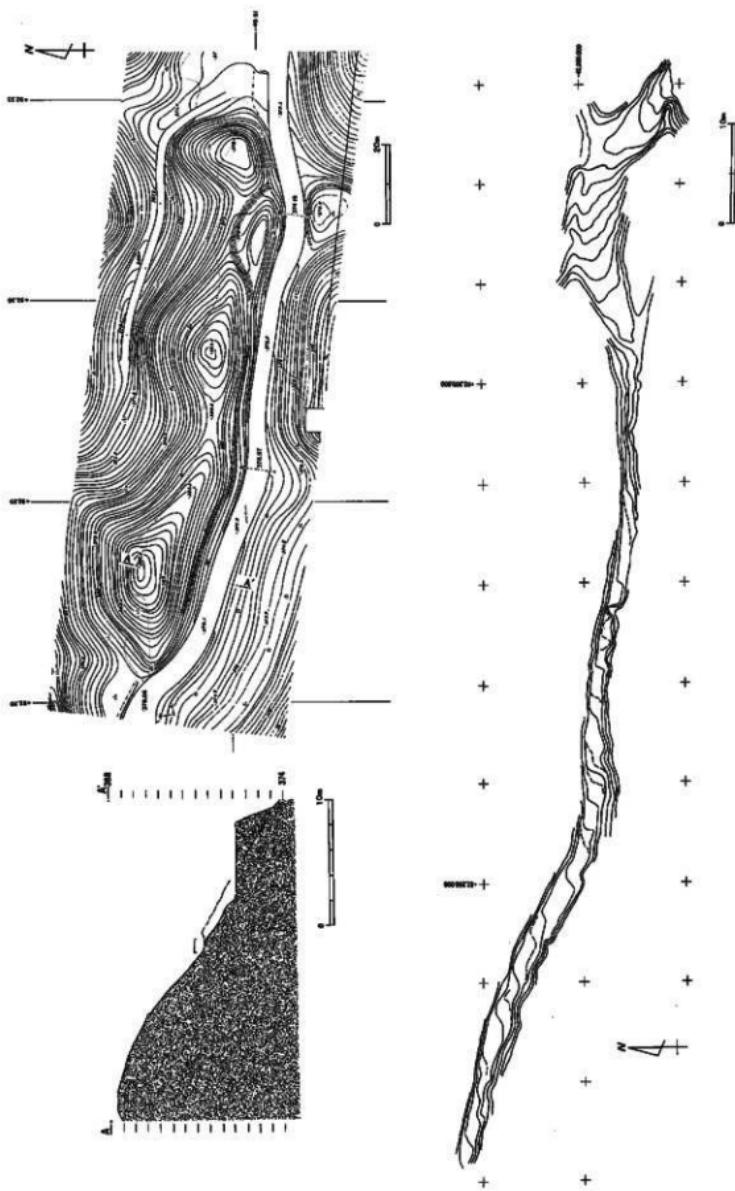
8は北宋錢の政和通寶（初鑄1111年、篆書）で、郭3の溝状造構から出土している。9～11は寛永通寶、13は文久永寶で、いずれも郭1の平坦面より出土した。12は鉄製の錢貨の残欠で、鋸歯が著しく錢文は全く見えないが、鐵錢であることから、寛永通寶であると見て大過ないと思われる。横堀跡の堀底から、1の染付け碗と一所に確認されたものである。14は郭3より採集された一錢青銅貨で、裏面に「昭和九年」と見える。

15は煙管の吸口で、銅製の吸口部の長さは7.4cm、最大径1.05cm。展開図にも示したように、中に菊花をあしらった菱彫文と波形文が浅く掘られている。なお竹製と見られるラウがわずかに残存する。郭1より出土したもので、一緒に見られた寛永通寶や文久永寶と同じ時期すなわち江戸後半と考えられる。

16と17は、青銅製の鉄砲玉で、16は径が1.29cm×1.11cmとやや偏平な球形で、鋸込みの際のぼりの痕跡が見られる。



第19圖 第3次調查出土遺物



第20図 98-B区 道路状造構

重さは6.6gである。17は直径1.15cmの球形で、重さは5.2gを測る。前者の大きい方は堀切跡の屈曲部堀底から、後者の小さい方は同じく堀切跡の南端の最下部から出土している。これらは直接年代を明らかにする決め手はないが、出土状況から16世紀末頃を考えたい。なおこの資料の詳細については、次節に掲げる成分分析結果報告を参照されたい。

(2) 98-B区の概要

98-B区は調査区全体の中でもっとも西寄りに位置し、長く続く瘦せ尾根にいくつか峰が突出する地形で、標高も他の調査区より相対的に高くなっている。

① 確認された遺構

この地区は砦跡の西限を明らかにする課題があって、尾根筋を中心に調査を進めたが、結果的に砦の関連施設は確認されず、替わって旧甲州街道に相当すると思われる道路状遺構を明らかにして終わっている。

道路状遺構（第20図）

95-A区で確認された遺構と同様なものが、98-B区の中においても東西延長約110m分を確認した。東側が低く、西の野田尻宿方面に向かって徐々に標高を増していき、この間の標高差は6m近くになる。東側の部分では南北から北へ尾根を横切り、三日月形のカーブを描いて再び尾根の南側に戻った後、尾根より少し下ったところを地形なりに西方へ進んでいくもので、尾根横断部以外では南側の路肩を欠く状況にあり、尾根横断部での確認により道幅は1.2m前後と判断される。『甲斐叢記』に、当時の甲州道中を「日陰の四寸道」とする表現が知られるが、ここで確認された約1.2mという道幅はそうした記録に矛盾しないものと思われる。

② 出土遺物

98-B区におけるは、道路状遺構からの陶磁器が2点と西端の峰の頂から発見された石鎚1点のみである。

陶磁器（第19図4・5）

4は、染付磁器の碗で、口径10.6cm、高台径4.2cm、高さ4.8cm。外面には型紙刷りによる唐獅子牡丹の意匠をあしらった図柄が見られ、見込みにはくずれ方の少ない松竹梅文がおかれる。5もまた染付磁器の碗で、推定口径11.6cm、推定高台径4.7cm、高さ5.15cm。外面には型紙刷りによる桜花文がめぐり、見込みには松竹梅文が見られるものである。いずれも道路状遺構を覆う表土内より出土しているが、ともに明治期の所産で、明治の半ば以降、それまで使われていた道路状遺構すなわち旧甲州街道が、一段下がって拡幅改修されたこと（中央自動車道拡幅前の町道=旧国道の整備）とともに、元の道路のあった場所に廃棄されたものとして理解される。

石 器

6は、標準的な形態の石鎚で、一部を欠くが現存長1.6cm、幅1.4cmである。石材は、産地推定分析の結果、諏訪市の北郊に産地が比定される黒曜石である。調査区内の西端にあたる標高372mの峰の頂上部で、砦の関連遺構の有無を精査中に発見されたもので、これに伴う具体的な遺構は見られず、供伴する遺物もない。したがって時期を特定することは容易でないが、形態から縄文時代に帰属する資料と考えられる。

(3) 第3次調査のまとめ

1998年度の第3次調査では、以上見てきたように長峰砦の時期のものと、その前後の遺構や遺物が確認されている。それを再度確認してここでのまとめとしたい。

砦の遺構が重点的に見出された98-A区では、長峰砦跡の歴史的位置づけに直接かかわる遺構として、郭1とその北側の横堀、郭2と郭3、そして郭の2と3の間に見られた尾根切りの空堀（堀切）などがあった。これらは後世の人工的な地形改变や、砦の立地する土地そのものが地滑りを起こしやすいという土地柄にもより、想像以上に残りが良くないもので、調査前にもたれた期待に十分応えるものではない。しかしながら堀切跡から出土した青銅製鉄砲玉などの遺物と合わせ、今後のこの地域の城郭研究の進展に一定の貢献をすることができるものと思われる。

98-B区では砦跡の西限を明らかにする課題を設定して調査を進めたものの、物見、のろし場、出構え等の想定に対して、砦の時期については何らの成果も見られていない。ただ瘦せ尾根を縫うようにして東西に伸びる道路状遺構が把握できたことは予想外の成果といえる。また98-A区にも見られたが縄文時代の石鎚が検出され、ここから東方にある大門遺跡群の中の撲点的な集落などに住まっていた人びとの狩り場的な空間が形成されていたのではないかとの見方も生まれたことも成果の一つに加えられるものである。

第4節 出土遺物の理化学的分析

ここでは調査成果の報告の一部として、出土遺物のうち第3次調査で出土した鉄砲玉2点に対する成分分析の結果と、同じく第3次調査で得られた黒曜石製の石鏡2点についての石材の産地推定の分析結果を掲載する。

(1) 堀跡出土鉄砲玉の成分分析

第3次調査の際に尾根切りの堀跡から出土した2点の鉄砲玉について、通常見かける船製のものとは外見上異なっており、正確な材質を把握する目的で成分分析を行っている。分析は、川崎テクノリサーチ(株)に委託して行ったもので、第19図17を資料1、16を資料2としての分析の結果は以下に掲げる報告のとおりである。

山梨県長峰砦跡出土鉄砲玉の成分分析

岡原 正明・小川 太一・伊藤 俊治

(川崎テクノリサーチ株式会社分析・評価センター埋蔵文化財調査研究室)

1 はじめに

山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査した長峰砦跡より出土の鉄砲玉について、学術的な記録と今後の研究のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査の依頼があった。

調査の観点として、①鉄砲玉の化学成分、②観察上の特記事項など、を中心に調査した。

その結果について報告する。

2 調査項目および試験・検査方法

2-1 調査項目

資料No.	名 称	重量 g	着磁力	M C反応	概観写真	成分分析
1	鉄砲玉	5.2	無し	有	○	○
2	鉄砲玉	6.6	無し	有	○	○

註:(1) M C反応とはメタルチェック(金属性探知機)への感応を言う。

2-2 重量計測と着磁力調査

計重は電子天秤を使用して行い、小数点1位で四捨五入した。着磁力調査については、直径30mm・1300ガウス(0.13テスラ)のリング状フェライト磁石を使用し、官能検査により「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで個別調査を行ったが、いずれの資料も着磁力は認められなかった。その結果は、調査項目に表示した。

2-3 外観の観察と写真撮影

入念な観察を行うとともに、資料をmm単位まであるスケールを同時写し込みで、かつ光線の照射方向を工夫し表面状況が明瞭に識別できるようにカラーで撮影した。

2-4 蛍光X線による化学成分分析

化学成分分析は、堀場製作所製蛍光X線分析装置(MESA-500)を用いて、資料の銹化表面と一部表面銹化層を研磨し、地金に近い状態にした研磨面の2箇所について、完全非破壊分析を行った。測定条件は、それぞれの分析結果のスペクトル図の下に記載した。

3 調査結果および考察

試料毎の調査結果および考察を次に述べる。

3-1 試料No.1 鉄砲玉

直径11.5mmで、全体に緑白色の銹で覆われた鉄砲玉である。表面層の銹は、かなり厚く覆われているが、メタルチェックによる検査では、残存金属反応がある。重量は5.2gである。

蛍光X線分析のスペクトルの分析値を下表に示した。

蛍光X線による研磨面の化学成分分析結果は、主要成分が銅(Cu) 78.0%であり、次いで鉛(Pb) 17.7%、錫(Sn)

1.6%そして硅素(Si) 1.7%であった。また、砒素(As)、アンチモン(Sb)、アルミニウム(Al)、鉄(Fe)が、微量元素として僅ながら含まれていた。主要成分が、銅(Cu)であり、かつ錫(Sn)を含有し、亜鉛(Zn)が検出されないことから、本鉄砲玉は、銅(Cu)と錫(Sn)の合金、所謂青銅と考えられる。

また、本資料の特徴として、鉛(Pb)が17.7%と高い値を示した。そこで、公知の古代銅製品類(銅鐸、銅矛、銅劍、古錢、銅鏡等)の主要成分である銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)の配合比¹⁾と比較した結果を下図に示した。本資料は、高価な錫(Sn)含有量を減らし、相対的に鉛(Pb)含有量を高めた青銅古錢類の配合比に近いものであった。青銅古錢を原料とした可能性もある。

以上のことから、本資料は、青銅であり、特に鉛(Pb)含有量の高い資料と考えられる。

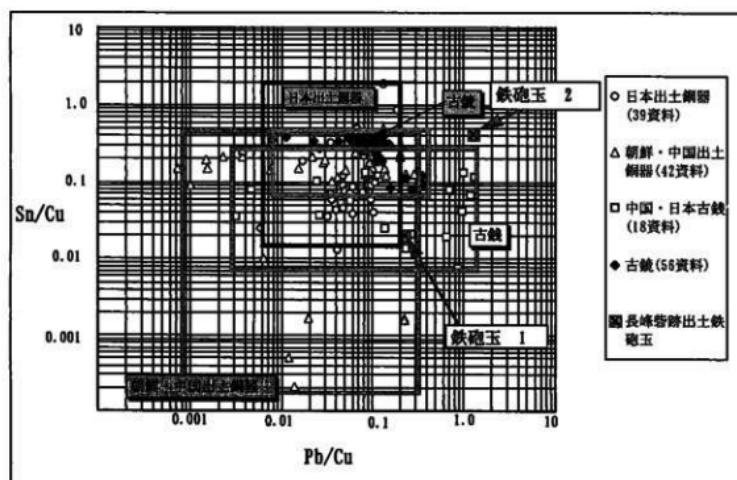
一方、銹化表面の蛍光X線による分析結果は、研磨面の分析結果と比較して、硅素(Si)とアルミニウム(Al)の含有量が高く、これは、資料表面に付着した土壤由来の化合物によると考えられる。また、銹化表面は、相対的に銅(Cu)、鉛(Pb)の含有量が低くなる反面、錫(Sn)が相対的に高い値を示し、研磨面の分析結果と相関性を示さなかつた。これは、從来より表面銹化層が、土中での環境、雰囲気などによって、同じ地金でも組成の異なる錆(腐食生成物)が発生しており、錆上からの分析値と地金とは殆ど相関がないこと²⁾が知られ、また、銹化の甚だしい銅製

		Cu	Pb	Sn	As	Sb	Si	Al	Fe	Ag	Ca	Cl	
資料No.1	銹表面	定量値(重量%)	68.8	8.8	5.7	0.3	0.2	9.6	4.8	0.7	1.1	0.0	0.0
		標準偏差(σ)	0.4	0.2	0.3	0.1	0.0	0.2	0.3	0.1	0.1	0.0	0.0
	研磨面	定量値(重量%)	78.0	17.7	1.6	0.2	0.1	1.7	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0
		標準偏差(σ)	0.4	0.3	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.3	0.0	0.0
資料No.2	銹表面	定量値(重量%)	46.6	7.3	15.2	0.0	0.2	18.5	9.1	2.7	0.0	0.0	0.0
		標準偏差(σ)	0.3	0.2	0.3	0.0	0.0	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0
	研磨面	定量値(重量%)	33.9	43.9	14.3	0.2	0.2	4.7	1.3	0.9	0.0	0.7	0.0
		標準偏差(σ)	0.3	0.4	0.3	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.3	0.0

定量値は、検出された元素濃度の合計を100重量%として補正して求めた。

標準偏差は、分析値の平均値に対するバラツキを表す値。

蛍光X線による化学成分分析結果



銅製出土資料のPb/Cu-Sn/Cu分布図

第21図 鉄砲玉分析結果

遺物では、銹化の特徴として、銅 (Cu) が少なく、錫 (Sn) が多くなる傾向にあること等によるものと推察される。本資料の場合、X線回折による表面銹化部の分析を行っていないので、明確に断言出来ないが、銹化表面の蛍光X線分析において、塩素 (Cl) が検出されないこと及び錫の色調が緑色であること、等から、塩基性炭酸銅である「緑青」すなわちマラカイト [Malachite: CuCO₃ · Cu(OH)₂] の存在が考えられる。

また、本報告では、資料の非破壊調査・分析を前提とし、資料を埋め込み、研磨して、その組織を観察する金属組織の形態分析を行っていないことから、本資料の製造方法に関する知見は、得られなかった。

3-2 試料No.2 鉄砲玉

直径12.9mm、幅11.1mmとやや扁平で、緑色の錫で覆われた鉄砲玉で、錫込みよりも観察される。表面層の錫は、かなり厚く覆われているが、メタルチェカーによる検査では、残存金属反応がある。鉄玉より軽く、重量は6.6gである。

蛍光X線分析のスペクトルとその分析値を前頁の表にまとめて示した。

蛍光X線による研磨面の化学成分分析結果は、主要成分が、鉛 (Pb) 43.9%で、次いで、銅 (Cu) 33.9%、錫 (Sn) 14.3%、珪素 (Si) 4.7%そしてアルミニウム (Al) 1.3%であった。また、砒素 (As)、アンチモン (Sb)、鉄 (Fe)、カルシウム (Ca) が、微量成分として僅かながら含まれていた。主要成分が、鉛 (Pb) であり、(Cu) と錫 (Sn) を高濃度で含有し、亜鉛 (Zn) が検出されないことから、本鉄砲玉は、鉛 (Pb) に、銅 (Cu) と錫 (Sn) の合金、所謂青銅を混合した可能性が考えられる。

また、本資料の特徴は、鉛 (Pb) が43.9%と非常に高いことにある。公知の古代銅製品類（銅鐸、銅矛、銅劍、古錢、銅鏡等）の主要成分である銅 (Cu)、錫 (Sn)、鉛 (Pb) の配合比1と比較した結果（前頁の分布図）は、本資料の鉛 (Pb)、銅 (Cu)、錫 (Sn) の配合比が、古代のいずれの銅製品類とも異なり、錫 (Sn) / 銅 (Cu) 比は、錫 (Sn) 含有量の高い古鏡あるいは銅利器等の青銅製品のレベルを保ちつつ、かつ鉛 (Pb) / 銅 (Cu) 比を、意図的に増大させた可能性が推定される。

以上のことから、本資料は、青銅であり、特に鉛 (Pb) と錫 (Sn) 含有量が高い資料と考えられる。

銹化表面の蛍光X線による分析結果は、資料No.1の分析結果とほぼ同様であり、また金属組織の形態分析を行っていないことから、本資料の製造方法に関する知見についても、同じく得られていない。

4 参考文献

- 中口裕『銅の考古学』雄山閣社 p.141 1986
- 千葉県立房總風土記の丘『銅製資料分析・調査』川鉄テクノリサーチ（株）1991
- 服部哲則『青銅器機器分析の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第38集 p.301 1992
- 山崎一雄『古文化財の科学』p.303 1991

(2) 出土黒曜石の産地推定

第3次調査の際に出土した2点の石鎚について、その石材である黒曜石の産地推定の分析を沼津工業高等専門学校物質工学科の望月明彦氏に委託して行った。分析結果報告の概要を以下に抄出する。

1 分析法について

セイコーアンスルメンツのSEA-2001蛍光X線分析装置が用いられている。測定条件は以下のとおり。

電圧: 50kV 電流: 2-30μA 照射径: 10mm, 3mm

測定時間: 産地試料 500sec、遺跡出土試料 300sec 真空

2 推定法と結果について

蛍光X線分析によって得られた結果を基に、図による方法（判別図法）と多変量解析（判別分析）との二つの方法で推定を行っている。両者の推定結果は非常に一致度が高いが、場合によっては推定結果が異なる場合もある。このようなときには、最終結果は判別分析による結果を採用している。産地推定の結果を下表に示した。

分析No.	遺物番号	器種その他	解析1	解析2	距離1	距離2	確率1	確率2	その他
NMT-1	長峰砕1	石鎚(完形)	SWHD	WDTM	1.11	79.11	1	0	諫訪星ヶ台
NMT-2	長峰砕2	石鎚(欠損)	KZOB	KZSN	7.43	30.47	0.99994	0.000006	神津島恩馳島

第4章 調査のまとめ

第1節 長峰砦跡について

ここでは、これまでに報告してきた3年次にわたる発掘調査の成果を通して、長峰砦跡の姿を浮き彫りにすることを試み、調査のまとめの一つとしたい。

(1) 研究史から見た長峰砦跡

初めに長峰砦跡の実体に迫る第一歩として、これまでの文献にどのように登場し、本県の中世城郭研究の流れの中でどのように見られてきたかについて整理しておく。

① 『甲斐国志』と『大門村絵図』

文化11(1814)年に完成した『甲斐国志』は、江戸時代後期の甲斐について徹底した調査を基にして編まれた地誌である。そのうちの古跡部で各地の中世城郭について現状や伝承などを記録し、現在においても基本的な文献としての位置づけを保ち続け、本県城郭研究の出発点ともなっている。

その『甲斐国志』古跡部の中で、初めて「長峰砦」の名が現れる。関係部分を引くと

野田尻村ノ東大門村ノ分界鷺ヶ巣ニアリ 宮道ノ傍ラ少シ高キ地はナリ 上平地ニシテ北方ニ堀切ノ跡アリ
(略) 城ノ南ヲ陣門ト云フ 当時門塙ナドアリテ官道ヨリ南ニ道ヲ通ゼルカ 此レ何人ノ居塙ナルコトヲ知ラズ
或イハ云フ加藤丹後守ガ居城ナリト 然レドモ丹後守ハ上野原ニ居住シテ敵國ノ領メタリ 且ツ此旧蹟甚ダ狭小
ニシテ常ニ住ムベキ所トモ見エズ 陣築ナド置キテ敵ノ急ヲ近郷ニ告ゲン所ニヤアラン (略)

と記されている。記事の内容は、i) 当時の砦跡の状況、ii) 城主は不明だが、加藤丹後守居城説があること、iii) 常住の城ではなく、有事の際の情報伝達拠点であろうとの見解、といったもので、たいへん分析的な見方で当時の長峰砦跡の状況がまとめられている。

この『甲斐国志』に先立つ文化4(1807)年の『大門村絵図』は、同書編纂の関連資料として伝わったと見られるものであるが、描かれた村の絵図の西端に「城山」と注記された小山が目にとまる。「甲州道中」の添え書きのある道路表現がその小山の辺を通過することをはじめ、城山の周辺の状況が『甲斐国志』の記述とよく一致を見ることから城山は長峰砦跡そのものとみて間違いない。とくに小山の頂が段状に描かれ、人工的な造成の様を反映したものと見られる点が注目される。県下の城郭の中で、大月市の岩殿城や都留市の勝山城など、江戸時代の繩張り研究の対象となって絵図が作成された一部の山城などを除くと、城郭の存在や周辺の環境までもが写実的に描かれたものは他に例を見ないものといえる。

② 郡誌から町誌まで

1924年の『北都留郡誌』には、同郡内の史跡についての記述の中で「長峰」の立項があり、次のように記されている。

大鶴村字大門邊より大月村箭坪坂の東方までを長峰といへり、道下池にあり渦り池と呼び、道の右方稍く高き所を長峰の城址ともいふ。徂徠の峠中紀行に、長峰阪を陟る、坂の右方疊跡は機山の時加藤丹後の築く所、疊前の小池土人誇って峠中八湖の一と称せり、水旱澇溢せず。云々、又東小佛より西條籠に及び南鶴縣を盡し皆一曉すべし云々。とあり

これによれば大正期の段階で、旧甲州街道を西に向かって右手にやや小高くあった長峰砦跡が「長峰の城址」と呼ばれていたことがわかる。また荻生徂徠が柳沢吉保の命を受けて宝永3(1706)年に甲斐を訪れた時の見聞をまとめた『峠中紀行』を引用して、機山すなわち武田信玄の時代に加藤丹後守の築いたものとの説や、周囲に眺望が利くことなどを紹介している。引用された徂徠の記述は、前項で見た『甲斐国志』や『大門村絵図』より百年ほど先行するもので、今のことろ砦跡の存在の初出といえる。

1975年刊行の『上野原町誌』には町内の文化財を取り上げた中で「長峰の史跡」についての記述が見られる。「長峰の史跡」というのは、第2章でもふれた上野原町教育委員会による1972年3月22日の史跡指定の際の指定名称である。この名称は『北都留郡誌』の史跡の説明の中に「長峰」があるのを受けたものと見られ、記述の内容はほとんど『甲斐国志』の記事を下敷きにして書かれ、「現在、この史跡の真ん中を中心道が通っている。渦り池と殿の井戸は完全に消失、あと形もない。砦の台地は削り取られて堀削となり、両側にわずかな跡を残すだけとなった。」と結んでいる。なお、町の史跡指定に関する経緯は第2章を参照されたい。

③ 城郭大系以後

本県で、考古学的な手法をベースに体系的な城郭研究の始まりは、1973年からの勝沼氏館跡の発掘調査にあるといえる。手探りでともいえるようにして開始されたこの発掘調査は、直ちに館跡の全面保存を勝ち取る力を示したのみでなく、その後に本県考古学研究が扱う対象の中に中世考古学がきっちりと組み込まれる方向性を生み出す役割も果

たした。

1980年には、考古学的アプローチによる本県での最初の城郭跡の集大成となった「日本城郭大系」(第8巻 長野・山梨)の刊行を見た。これは5年間7次に及ぶ勝沼氏館跡の発掘調査にかかわったメンバーにより、県下で約330の城郭遺構の把握が行われたもので、同書の中で「長峰砦」は、城郭一覧表の扱いで「加藤丹後守の居城とも伝えられる。仲間川右岸に配された砦。中央自動車道のため半壇」と短く報告されている。ここでの扱いがたいへん簡略なのは何といっても中央自動車道の建設の影響により遺構の実体がつかみにくくなっていたことが大きいと思われる。実際執筆者の一人萩原三雄は同書の中の「城郭の調査・保存の現況」と題する概説の中で、道路等によって破壊を受けた城郭の例示の中の一つにここを取り上げており、そうした扱いは1986年の「山梨の中世城館跡」にも引き継がれる。一方この城郭大系の仕事の中で北都留を担当した室伏徹は「甲斐・武藏・相模国境の城砦」と題する同書所収の小論において「上野原町の大倉砦・長峰砦・牧野砦・柄穴御前山砦などの桂川下流域に設けられた砦群」が大月市の岩殿城を核に有機的な繋がりの中に位置づけられるものとの見通しを立てている。

1991年には萩原三雄編著の『定本山梨の城』があり、「長峰砦」はCランク記事として記述されるが、その本文は町誌を大きく出るものではない。ただそこで、執筆者の山下孝司により明らかにされた中央自動車道の北側山林内に依存した遺構の網張図が掲載されている点は大いに注目される。

④ 「長峰」について

以上、これまでの城郭研究の中で「長峰砦」がどのように見られてきたかを振り返ってみたが研究史の終わりに「長峰」の地名の確認を行っておきたい。

既に第2章などでもふれたとおり、長峰とは遺跡周辺の地形的特徴から生じたものといわれており、先に見た「北都留郡誌」がいうような広い範囲を指す地名として、既に中世にはそれが確認される。すなわちかつて砦の西方、野田尻の南にあったという長峰山長福寺旧蔵の大永5(1525)年銘の鈎口や、現在その鈎口を所蔵する西光寺に伝わる15世紀末から16世紀前半の様式を持った釈迦三尊板碑が知られている。後者は追刻の銘文に天長元(824)年の年紀と「長峰山」の文字が判読され、また「甲斐国志」の「長峰砦」の記事は「太平記」巻31に見える長峰勘解由左衛門の存在にもふれているが、これらは長峰がより通り得ることを示している。

このように中世に、しかも戦国期の早い段階から「長峰」と呼ばれる地域があり、そこに成立した砦であるから「長峰砦」の名称が誕生したと思われるが、「甲斐国志」は「蕉ヶ巣」とより具体的な所在地名をあげながらあえて「長峰砦」とされている点注意される。これは「甲州道中分間延絵図」に、砦のあった位置に砦のことなどは記されていないが「此辺字長峰」と書かれており、はじめは広い範囲を指していた「長峰」も近世半ば過ぎ頃には、砦の付近にある程度限定した地名に変わっているためではないかと考えることもできよう。

(2) 遺構・遺物の検討

① 検出された遺構・遺物について

砦の遺構が重点的に見出された98-A区では、長峰砦跡の歴史的位置づけに直接かかわる遺構として、郭1とその北側の横堀、郭2と郭3、そして郭の2と3の間に見られた尾根切りの空堀(堀切)などがあった。

このうち最高所におかれた郭1は、その北側の横堀の存在などと考えあわせ、砦の中心的施設であったと判断されるが、建物や櫓など作事的な要素については不明なまま終わっている。

郭2としたところは大きく掘削を受けた結果によるもので、砦の姿とはかけ離れた状況にあることが明らかである。また郭3は比較的大きな溝状遺構が横断しており、それを堀と見るかどうかで、その位置づけも変わってくるが、東辺と南辺に地形崩落の状況があり、当時の姿に迫ることを拒んでいる。

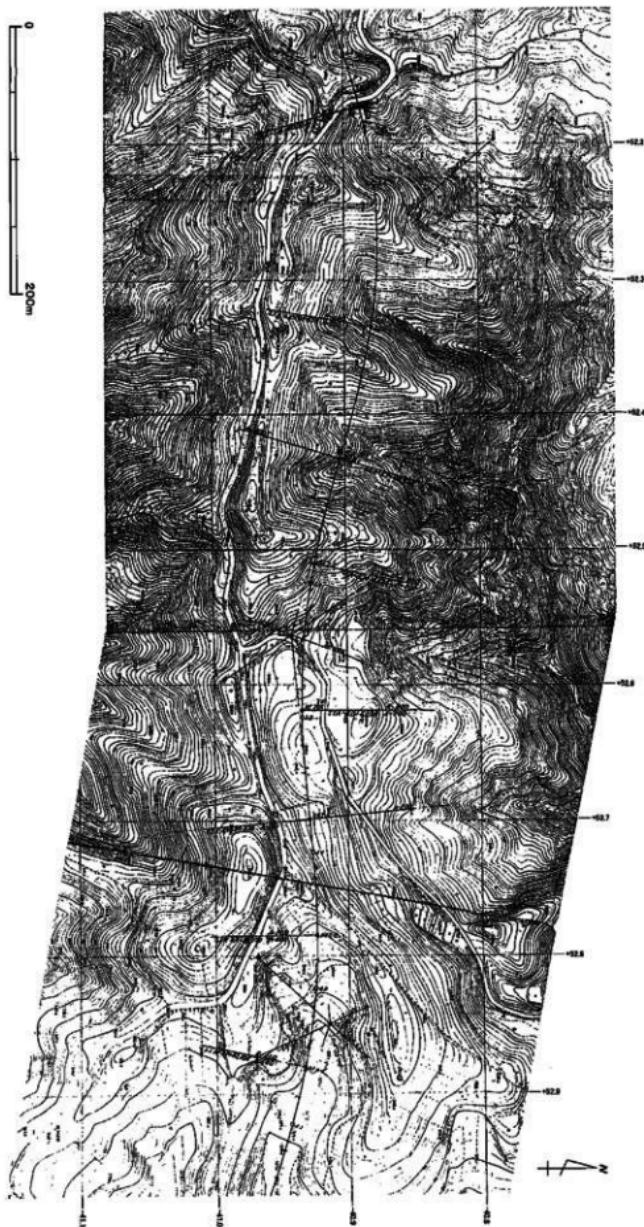
空堀である堀切は堀底を通路として使われていた状況が推察され、門ないし木戸のような施設が伴っていた可能性が認められた。これについては「甲斐国志」に記録された「陣門」の存在があり、「城ノ南」するのに合致するかどうか問題であるが、否定しきれないものと考えられる。

また砦の時期に帰属する遺物は稀少で、後でまたふれる堀切跡からの2点の鉄砲玉と中世の土器片と考えられるものが横堀付近と郭3内の溝状遺構から検出されたのみである。郭3の溝状遺構上部から北宋銭が1点見られたがこちらはやや遺構との結びつきが弱いものといえる。県内で山城・砦などについて全面的な調査を行った例は、比較的規模の大きなもので南部町の葛屋鐵砦(報告書は葛谷城)、少し規模の小さい須玉町前の山烽火台などがあり、またいくつかのトレンチ調査が行われたものをあわせて、そこでは遺物がたいへん少ないという傾向が共通している。この長峰砦跡も例外にもれずという結果だといえる。

② 全体像の復元

こうして長峰の砦は、郭1を中心に横堀や堀切などを配置しながら構築されたという状況が、たいへん不十分ながらも明らかになった。

第22図 中央自動車道の計画線路の地形図



調査着手以前には、後世の改変を受けて状況がわかりにくく、また地形的に東側の丸山（97-A区）や西側の複数の尾根上のいくつかの峰（98-B区）などに出構的な遺構が及ぶ可能性などを見て、砦跡の範囲を広く想定して取り組んだが、結果的にそれらの地区には砦の遺構と思しきものは具体的に把握されなかった。

こうした結果を踏まえて、後世の改変などにより失われた部分を復元し、砦の当初の姿はどのようなものであったのか考えることが次の課題になる。

このことを考える手掛かりとして、当初の中央自動車道の計画段階の、中心線のみが入った地形図の提供を受けることができたので第22図に掲載する。また中央自動車道工事直前の1963年撮影の空中写真を図版1に載せた。それらの資料と発掘調査の成果、また山下1991による踏査成果や『甲斐国志』の記述などをつなぎ合わせて考えると、およそその全体像が浮かんでくる。

すなわち砦は、郭1を中心にならべて東へ伸びる尾根と、途中から北へ向かう尾根とを利用して構築されたと見られる。東へ伸びる尾根には壠切や郭3などが配された。途中から北へ向かう尾根は大部分が中央自動車道により切り取られているのだが、そこにも『甲斐国志』がいうような顯著な壠切が存在したと見られ、その先は山下氏が確認した遺構に統く。また二つの尾根に挟まれた区域も等高線が緩やかな部分などに一、二の郭が配置されていた可能性が思われる。

このように、およその縄張りを考えることが可能だが、細部はほとんどわからないので全体的な構造から、この砦を開拓勢に備える甲州側の施設との評価が明確にできるのか、あるいはその逆もあるのか、時代的な変遷はどうか、といった点までは明らかにするはできなかった。

③ 青銅製鉄砲玉をめぐって

壠切跡の壠底から出土した。調査中、鉄砲玉は鉛製との既成概念にとらわれていたため、青みがかった緑色に目を疑った。その後資料整理の段階で、いくつかの文献により青銅製の弾丸や鉄製のものもあることなどが判明した。

青銅製に限定していえば東京都の八王子城跡や群馬県の太田金山城跡、名胡桃城跡、内匠城跡、大島上城跡、茨城県の真壁城跡、静岡県の中山城跡などに出土例が報告されているが、県内ではまだ他に報告を見ない。

群馬県下の出土資料を中心に鉛同位体分析による原材料の産地同定や年代の割り出しまでも視野に入れた研究がなされている。長峰砦跡でも同様な方法を探るべきであったが時間的な関係で、第3章第4節に見るような成分分析にとどまっている。

この分析の結果から青銅であることが追認され、うち一つについては「青銅古銭類の配合比に近いもの」との所見も得られている。これについては勝山村に所在する富士御室浅間神社の文書中に、年未詳の御室神主あて、鉄砲玉の用として悪錢を納めるよう指示している文書の存在が想起される。この文書の発給者は武田氏であると見られているが、武田氏に限らず、経済的・問題となる不良銭を選り分け、市場から駆逐するとともに鉄砲玉の鋳造材料を確保することがかなり一般的に行われたのではないかと思われ、長峰砦跡出土資料もそうした社会的状況に結びつくものと理解することができる。

その長峰砦跡での鉄砲玉だが、実際の交戦の中で発射されたものか、それとも駐屯していたものたちの遺失物的なものなのか、ということについては直接的には判断しない。出土状況から飛躍的に考え、壠切を挟んでのやりとりの中で郭2側から東方向に発射された可能性があることを付け加えておきたい。

④ 調査成果を踏まえた長峰砦の歴史

調査のまとめの最後に、砦の成立と廃絶の状況を見て、この砦に関する調査報告を終わることにしたい。

江戸時代にまとめられた地誌や紀行文などの史料によれば、この砦は、武田信玄の時代に、上野原加藤氏によって、常住の城ではなく、有事の際の情報伝達の拠点の一つとして築かれたということになる。

『日本城郭大系』所収の室伏論文は、文献的な裏付けがないのははっきりしないがと断りつつ、「城砦の構造からみると、上野原の四つの砦や駒宮砦については、甲府市の要害城（永正17=1520築城）・湯村山城（大永3年=1523築城）などの構造を一つの基準とするならばそれ以前に築かれたものであろう。他方、相模との対陣などの様子からみると、小山田氏が敗戦する上野原町西部で起こった矢坪坂合戦（享禄3年=1530）以降で、上野原加藤氏の記録が再び現われる永禄4年（1561）までの間であろうと思われる。」と、桂川下流域に設けられた大倉砦・牧野砦・橋穴御前山砦などの砦群、さらに葛野川中流の駒宮砦などセッピ的に論ずる中で、長峰砦などの成立時期について述べている。今回の調査ではそうした見解を左右するものは得られていない。

つぎに廃絶であるが武田氏の領固体制が完全に終わる天正10（1582）年ごろには、基本的な役割を終えたと思われる。壠切跡の状況から情勢不安がしばらく残る1600年代の初期にはまだ、往来に対する幕府側の監視施設のようなものは残されていかもしれない。横堀跡の状況などから江戸時代の末頃までは砦はまだよく姿をとどめていたと見られるが、その後今日までの間、大きく変貌を遂げたということになろう。

第2節 丸山稻荷について

(1) はじめに

丸山稻荷は長峰砦跡の東端に位置している。砦の関係からすれば、この地名は物見の役割りをするところにある。文化4年(1807)7月記の森島家所蔵の『大門村絵図』には、甲州街道を鶴川から野田尻へ向かう途中、大門集落を過ぎ観音堂・東權現をとおり、北にカーブして直線になるあたりを丸山と記している。この時の「丸山」には、周辺の寺社は明確に名前やそのマークが記されているが、ここでは、その地名のみであった。そのため、当時からこの地に稻荷神社があったかどうかは不明である。では、何時ごろ、稻荷神社は祭られるようになったのであろう。

(2) 稲荷信仰について

稻荷信仰は京都伏見の伏見稻荷大社を頂点とした、約3万社で信奉されている。神社本庁所属の神社が、全国で約8万社あるうちの約3万社といえば、その4割弱にも相当する。のことからも、信仰の広さが窺えるのである。なぜ、これほどまでに民衆に浸透したのか。もともと、伏見稻荷大社の東側には「稻荷」という名の山があり、これを背にして存在していた。その稻荷山上に下社・中社・上社がたてられ信者の聖地となっていた。これが山麓に神殿が移され信仰も一般的で身近なものになる。そして、中世の頃になると神使としての狐が信仰の対象になり、真言密教の茶枳尼(だきに)天とも習合し、近世にいたっては、民間における稻荷神が農業・漁業・商業神としてまつられるほか、託宣神・憑物・福神など様々な性格を付与されて全国津々浦々に広まっているのである。

稻荷信仰の全国的な普及は、おもに伏見稻荷をはじめとする宗教家の解説や宣伝によるところが多く、このうち民間宗教家が介した稻荷は流行神様相を帯びて広まり、近世中・後期に江戸市中に広まった稻荷信仰はその典型である。一般的な民衆がこのような信仰を容易に受け入れことができた背景には、信仰対象の狐が、田の神としても信仰されていたという考え方かが一般的である。また、稻荷と狐とを同一視する観念も支配的で、狐の鳴き方や食べ方で豊凶を占うということも行われていた。このような稻荷信仰の分布は全国的であるが、西日本より東日本のほうが濃密といえる。そのなかでも、関東地方は、全国の神社本庁所属の約四割の稻荷神社には含まれない、屋敷神としての稻荷が非常に多い地域である。

(3) 丸山稻荷について

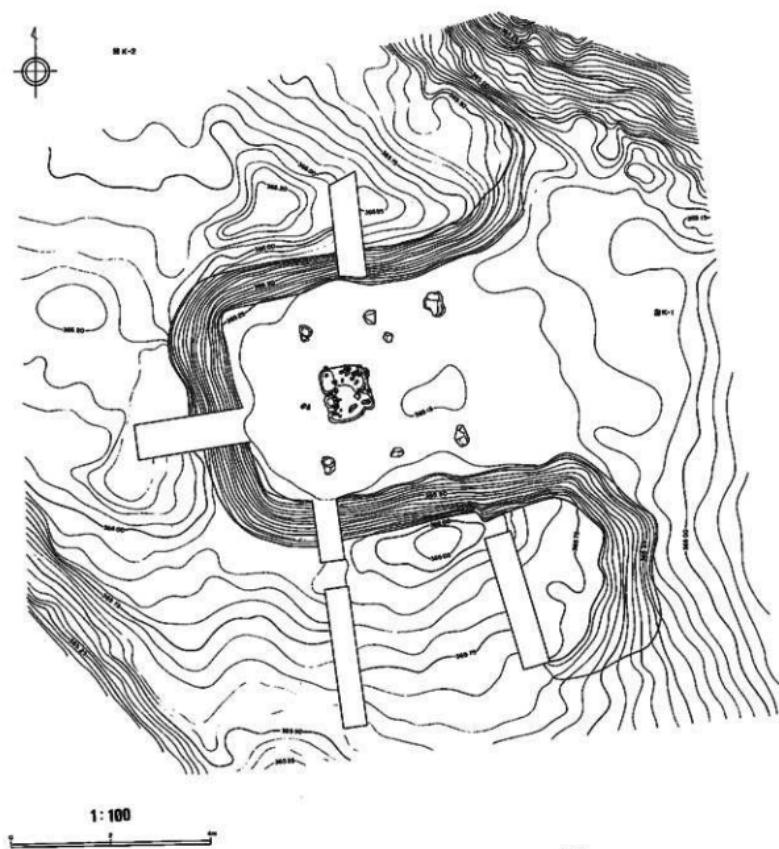
丸山稻荷は、大門の集落のはずれの小高い峰の先端頂上部に奉られていた。東側に開口するコの字型の土壘に囲まれ、石の祠が鎮座していた。その手前両側に石製の狐が2体向かい合っている。祠は、高さ59cm・屋根の幅42cm・祠の幅23cm・奥行21cmの大きさで、稻荷(狐)は、「明治四十四年六月吉日」と名記されている。東側から真っ直ぐ祠まで参道がつくれ、急な斜面を登っていった。この丸山稻荷は、中央自動車道改築工事の対象地域に入っており、現在の道路まで削られる計画となっており、そのため、祠を移設されることになった。現在は、丸山から100mほど大門集落に近い平坦な場所に奉られている。

祠が移設したあとに調査をおこなったわけであるが、稻荷信仰の遺構が幾つか発見された。まず、祠を取り囲むコの字型の土壘は、人工的につくられたことである。たぶん、稻荷を含めた民間信仰の対象物を奉るために作られたと推定される。次に、この祠を覆っていた建物があった可能性があること。祠があった位置を囲むように一間半四方に礎石が配置されていた。そして、土壘の北側には、お堂の屋根に使われていたと思われる瓦が廻棄されていた。この瓦の中には、ご飯茶碗・湯飲み茶碗・灯明皿などの陶磁器片が含まれていて、お堂が取り払われた時に一緒にまとめられたお供えものの可能性が高い。また、土壘の周辺からは、お賽銭とおもわれる「寛永通寶」などの古銭も出土しており、ここが、信仰の対象として参拝するひとがあった事を窺わせていた。

(4)まとめ

以上のように、稻荷信仰は江戸時代中・後期から民衆の間に広く浸透していく、江戸から離れた大門村にも信奉されるにいたった。今回調査した丸山稻荷は、たぶん、神社として登録はされていない屋敷神的なものと考えられる。そして、この地に奉られた時期も、江戸時代終わりから明治初期と、比較的新しいことが、遺物などから想定される。しかし、神使いとしての狐を奉っていることは変わりなく、現在でも、「お稻荷さん」と呼ばれ親しまれ大切に守られている。

今、「丸山」の峰は当時の面影はなく、変貌が激しいが、どの時代でも、街道を行き交う旅人の休息の場となっていたことであろう。



第23図 丸山稲荷の造構平面図

第3節 旧「甲州街道」について

(1) はじめに

3 次に及ぶ長峰砦跡の発掘調査の中で、とりわけ第1次と第3次の調査で、旧「甲州街道」の遺構が、図らずもというかたちで確認された。そこで本報告書の最後に、その遺構の状況などを見つめ直し、すでに明らかにされている近世及び一部近代にかけての交通史を踏まえながら、若干の検討をしておきたい。

いま「図らずも」と述べたが、中世の城郭の調査を行う以上、事前の課題整理の中で、砦と交通の関連のことは問題設定の中に置かれてはいた。そして中世の交通にある程度沿った砦の位置づけを予想し、取り組んだつもりではあった。が、実際に旧「甲州街道」の、遺構としてのそれに具体的に遭遇するとは予想していなかった。そのために、これが五街道の一つの遺構なのだと理解されるまでは、多少の時間を要した。

これまで本報告書では、旧「甲州街道」と表記してきたのは、一般的に親しまれている「甲州街道」という、東京と甲信地方を結ぶ現在の主要道路（あるいは国道20号線）に対し、その旧の道路という意味合いで用いてきた。少し歴史学的でないところがある用語である。では、歴史的に見た「甲州街道」はどうなるのだろうか。

(2) 「甲州街道」の歴史の中で

すでに第2章などで述べたように、関東と甲斐府中方面を結ぶ道は古い時代から存在したと考えられるが、この点についての具体的史料は乏しい。

江戸幕府の創設と共に、江戸から各地に向かう主要幹線道路としていわゆる五街道が整備された。「甲州街道」もその一つで、信州下諏訪の中山道との合流までの延長55里的道程に、45の宿駅（駅数には諸説ある）が置かれた。慶長9年（1604）年頃までに一通りの整備がなされたと見られているが、当初の呼称は「甲州海道」であった。それが海沿いの道ではないとの理由で「甲州道中」と改称されたのは享保元（1716）年のことで、以来公式にはこの名称が用いられている。

江戸時代には、軍事的な政策上、一般の街道は人や駄馬などの通行のみで、車の通行は押さえられていた。そのためわが国古代の律令政府が目指した直線的な道路などとは違う、自然地形に従った線形で、当然、現代の自動車社会の中で考えられるイメージとは大きく様相を異にするものであった。

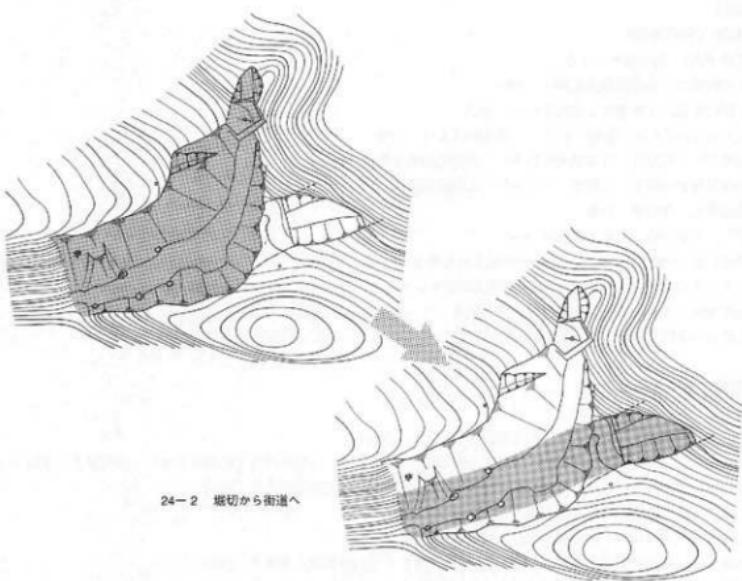
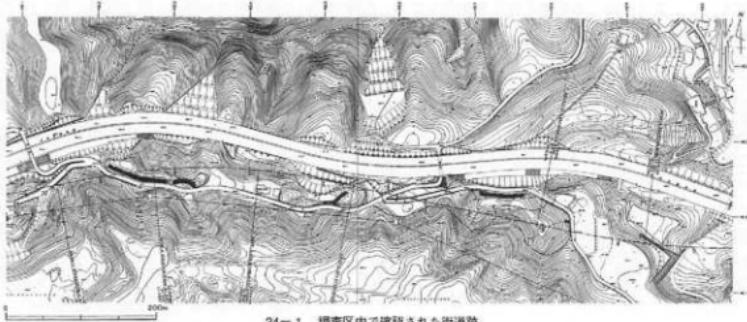
「甲州街道」においては、そうした状況は明治期になってもしばらく続いていることは明治天皇の巡幸記などで窺い知ることができる。明治18（1885）年に国道の制度ができ、「甲州街道」が上野原—野田尻—鳥沢ルートで国道16号とされたころから、車も通行できるような道路に改良された（調査時にあった町道がそれ）と見られる。明治の後半から昭和の初め頃まで道路開削・橋梁工事などによって、現在の国道20号と同じ相模川沿いの四方津ルートが定着してからは、長峰付近の道路は、旧の「甲州街道」の位置づけとなって今日に至っている。

(3) 道路状遺構の検討

発掘調査の中で発見された道路状遺構、すなわち遺構としての旧甲州街道は、次ページの第24図の中に示した範囲で存在した。本来一続きであったものが、後世の地形変化などにより、遺構としては断続的な状況になった。この付近ではとくに痩せた長峰の尾根の尾根筋よりや下がったところを、北側を行ったり南側に出たりし、まさにづら折りの山道となっていることがわかる。道路の幅はあるが、先にも調査成果のところで報告したように（第3章第3節）、尾根を横切るところで測ってみても約1.2mで、尺貫法でいうなら4尺といえよう。尾根の斜面や鞍部に若干の掘削を加えて道路としたもので、粘土質な地山からなる路面が硬化面として確認されたのみで、石敷き等の特別な施設は確認されていない。

この道路状遺構について、直接年代を特定できるような遺物等の手掛かりは得られなかった。ただ第24図の中ほどに示したように、それまで砦の空堀であったものを改修しての道路が開かれたようであり、それは土層観察などの所見からして、江戸時代の早い時期と判断され、状況的に旧甲州街道に相当するのではないかとの見方が生まれた。さらに「大門村絵図」に描かれた状況や地元の伝承とも整合することで結論が得られた次第である。

江戸期に入ると役割を終えた砦跡の一部を掠めて甲州海道が整備される。行き交う旅人の中には、いくつかの紀行文に書き残されているように、殊に風光明媚な景観の中にあった長峰の地を通じる時、しばしの憩いを求めて道を外れ、砦跡の主郭部分（郭1）にあがって、砦の時代に思いを馳せ、故事を偲んだり、あるいは単に眺めを堪能し、一服をつけたりとういうことがあったであろうことは想像に難くない。砦跡の郭1などから得られた遺物の中に、寛永通寶・文久永寶などの銭貨や煙管などが見られたことはそうしたことと思われるものであるが、街道を旅するものたちの旅の憩いのみならず、甲斐から相模・武藏へ、あるいはその逆にと、国境を越えて行く折の手向け的な行為もふくまれていたと見られようことも付け加えておきたい。



「五海道中細見案内」(安政 2 年)
甲州道中部内道。(鶴川一大目)

第24図 旧甲州街道の確認

第4章 結 論

3次にわたり、3万m²余りの範囲を対象に実施してきた長峰砦跡の発掘調査の成果は、以上報告したとおりである。報告を終わる前に、これをまとめる中で、気付きながら十分に掘下げができず今後に委ねなければならなかつた点にふれておきたい。

近年、県内でもいくつかの城郭遺跡で、歴史・民俗・自然など隣接諸科学を併用しての総合学術調査が行われている。本調査では、埋蔵文化財の記録保存という性格上の限界もあるが、極力そうしたアプローチも取り入れるべきであったがかなわなかった。考古学的な調査成果についても、中央自動車道建設工事施行以前の遺構等の状況を復元し、その中で理解を深める試みを考えたが、データ的な限界もあって為し得なかつた。中央自動車道の北側に残る区域の状況も合わせた分析などを行い、周辺城郭遺跡の再評価とともに、この長峰砦跡の歴史的位置づけをより確かなものにしていくことは今後の課題となつた。

この報告にはいくつかの不備もあるうかと思うが、これについてはご叱正をいただきながら、成果が地域の歴史を考える上での基本資料として活用されていくよう、引き続き取り組んでいきたい。文末となったが、長峰砦跡の発掘調査にご理解・ご支援をいただいたすべての方々に感謝申し上げ、結語としたい。

【参考文献】

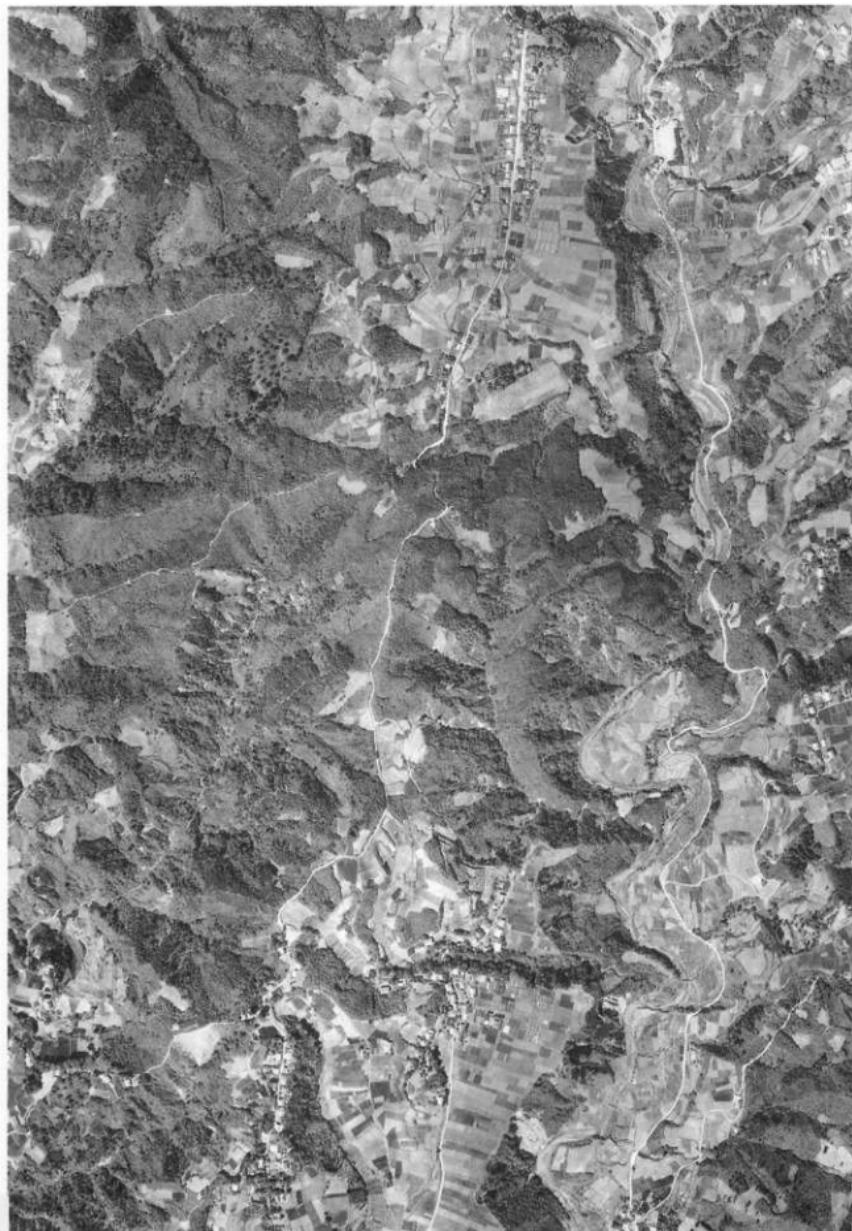
1) 図書類（刊行年順）

- 1 「甲斐国志」（勇山閣版による）
- 2 「北都留郡誌」北都留郡誌編纂会 1924
- 3 「上野原町誌」上野原町誌編纂委員会 1975
- 4 「日本城郭体系」8（長野・山梨） 新人物往来社 1980
- 5 「山梨の中世城館跡 分布調査報告書」山梨県教育委員会 1986
- 6 「地形分類基本調査 上野原・五日市」山梨県農務部 1988
- 7 「都留市史」資料編 1988
- 8 「定本 山梨の城」郷土出版社 1991
- 9 「甲州街道」（歴史資料集）建設省甲府工事事務所 1993
- 10 「うえのはら文化財みて歩き」（上野原町文化財マップ）上野原町教育委員会 1997
- 11 「矢坪遺跡・談合坂遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第151集 山梨県教育委員会ほか 1998
- 12 「上野原の遺跡」（上野原町郷土資料館企画展リーフレット）上野原町教育委員会 1999

2) 論文等（著者名五十音順）

- 上野晴朗 「甲斐武田氏」1972
- 宇田川武久 「鉄砲と石火矢」日本の美術390 至文堂 1998
- 小西直樹 「西ノ原古墳」「1999年度上半期 遺跡調査発表会要旨」山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古学協会 1999
- 笛本正治 「武田氏と国境」「甲府盆地—その歴史と地域性」地方史研究協議会 1984
- 荻原三雄 「城郭の調査・保存の現況」（前掲4所収） 1980
- 荻原三雄 「甲斐の城郭と研究の一覧点」（前掲4所収） 1980
- 荻原三雄 「岩殿城の史的考察」「山梨考古学論文集」Ⅱ 山梨県考古学協会 1989
- 宝伏 徹 「甲斐・武藏・相模国境の城砦」（前掲4所収） 1980
- 持田友宏 「甲斐国の板碑1 郡内地方の基礎調査」 クオリ 1988

図 版



長峰跡周辺空中写真（1963年撮影）

図版 2



95-A区 調査前



95-A区より満り池跡地を望む



95-A区 調査風景



95-A区 調査風景



95-A区 調査区西側（東から）



95-A区 調査区東側（東から）



95-A区 C-5 グリッド北壁セクション（南西から）



95-A区 C-4 グリッド東壁セクション（西から）



95-A区 1号土坑（北東から）



95-A区 1号土坑 炭化材出土状況



95-A区 旧甲州街道 東京方面を望む



95-A区 旧甲州街道 山梨方面を望む



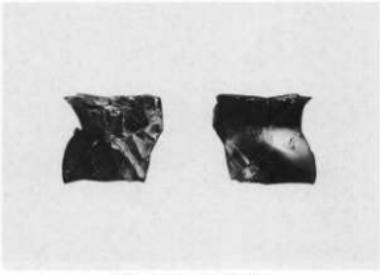
95-A区 旧甲州街道 11号トレンチ (E-E')



95-A区 旧甲州街道 13号トレンチ (F-F')



95-B区 調査区全景（南西から）

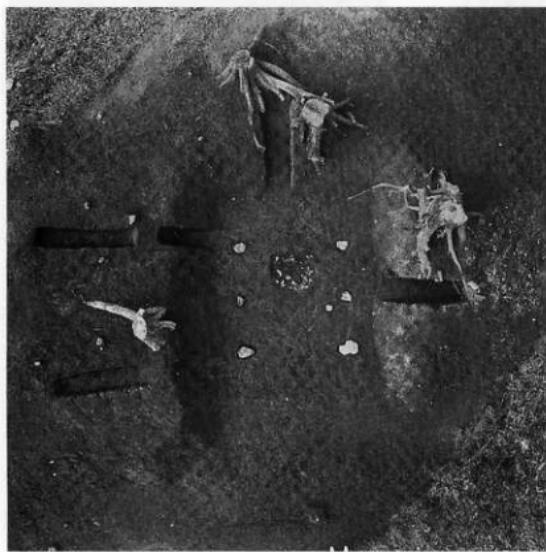


95-B区 出土遺物

図版 4



97-A・B区全景



97-A区 土壘状構造全景



97-A区 土壌状造構調査前風景



97-A区 トレンチ調査風景



97-A区 土壌状造構調査風景



97-A区 遺物検出状況



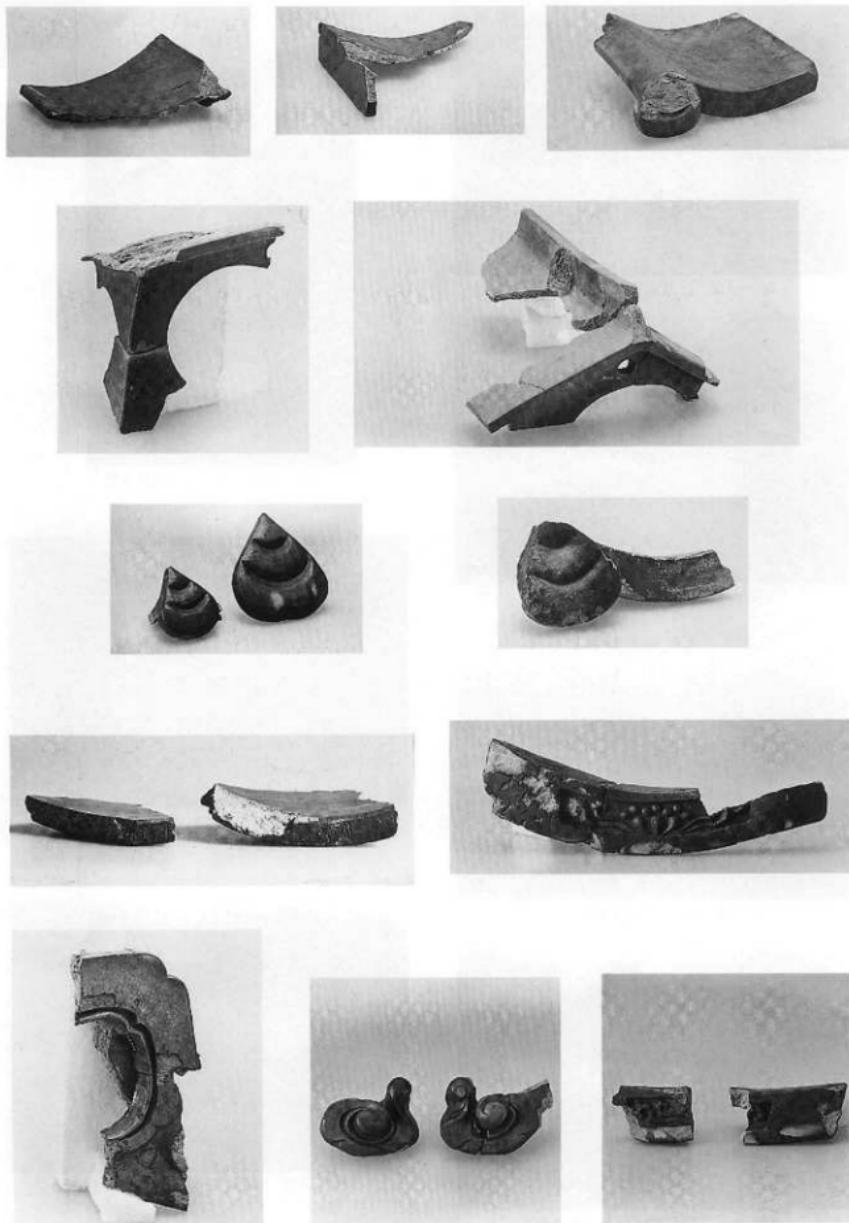
97-A区 調査風景



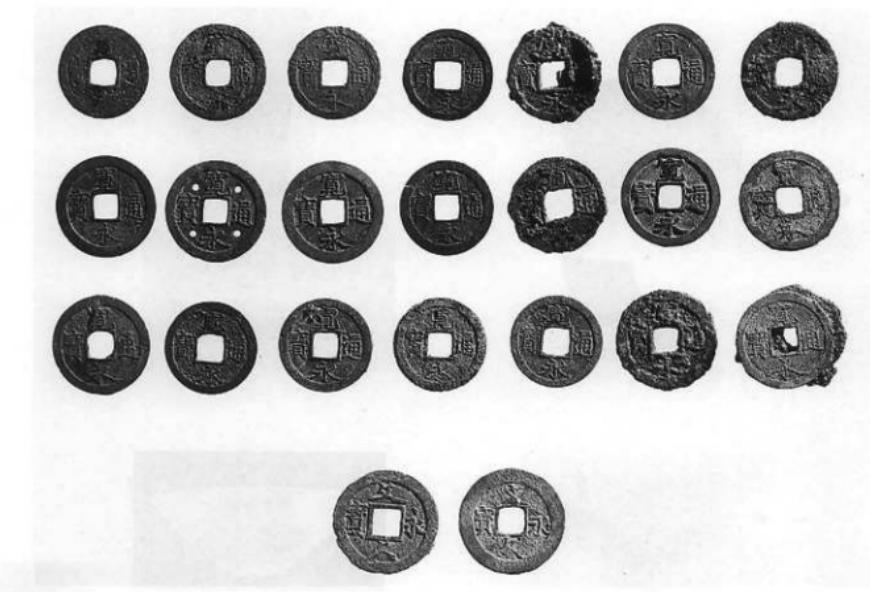
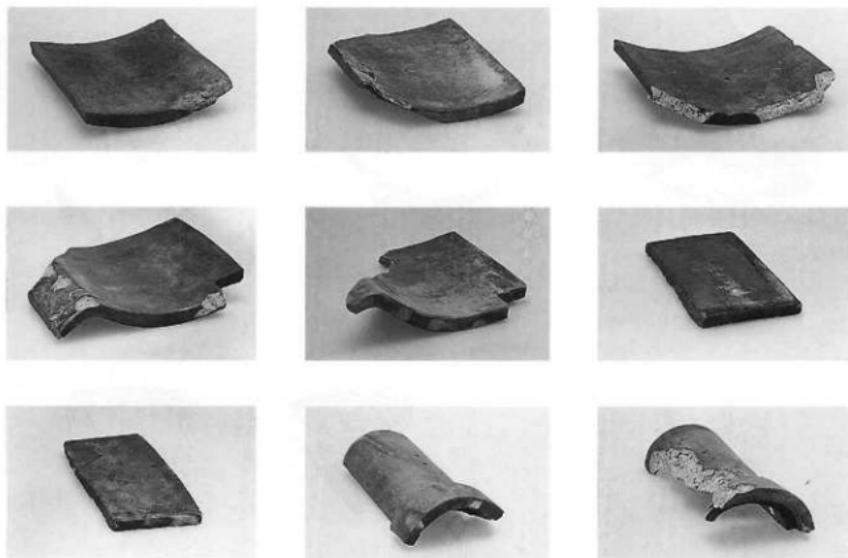
97-A区 礫石検出状況（東カラ）



97-A区 礫石検出状況（南東カラ）

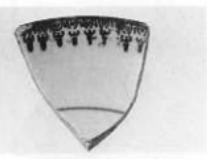
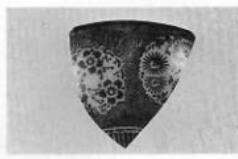
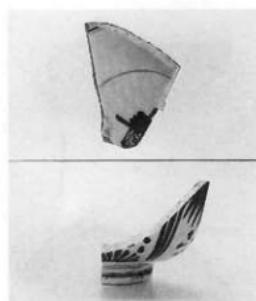


第2次調査 出土遺物（瓦類）



第2次調査 出土遺物（瓦類・錢貨）

図版 8



第2次調査 出土遺物（陶磁器）



第3次調査全景



98-A区 調査前状況



98-B区 調査前状況



98-A区 堀切跡調査前状況



98-B区 道路状遺構調査前状況

図版 10



98-A区 郭1 東半



98-A区 郭1 東半



98-A区 郭1 調査状況



98-A区 郭1 調査状況



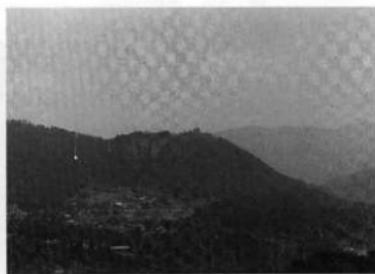
98-A区 郭1 西半



98-A区 郭1 調査状況



郭1 から 南方の四方津御前山脈を望む



郭1 から 北方の大倉山を望む



98-A区 遠景（東から）



98-A区 郷 2



98-A区 郷 1 北側斜面



98-A区 横堀跡 調査状況



98-A区 横堀跡 調査状況



98-A区 横堀跡（東から）



98-A区 横堀跡（東から）



98-A区 横堀跡 造物出土状況

図版 12



98-A区 堀切跡 掘下げ前状況



98-A区 堀切跡 掘下げ前状況



98-A区 堀切跡 確認状況



98-A区 堀切跡 トレンチセクション



98-A区 堀切跡 調査状況



98-A区 堀切跡 鉄砲玉出土状況



98-A区 堀切跡 南半



98-A区 堀切跡 北半



98-A区 堀切跡 確認状況



98-A区 堀切跡から郭1を望む



98-A区 堀切跡 道路状遺構確認状況



98-A区 堀切跡 調査状況



98-A区 堀切跡 道路状遺構確認状況



98-A区 堀切跡 南端面確認状況



98-A区 堀切跡 北谷状地形セクション



第3次調査 調査スタッフ

図版 14



98-A区 部3 全景



98-A区 部3 調査状況



98-A区 部3



98-A区 部3 溝状造構



98-A区 部3 溝状造構セクション



98-A区 部3 溝状造構



98-A区 部3 調査状況



98-A区 部3 北宋銭出土状況



98-B区 調査状況



98-B区 道路状造構調査状況



98-B区 道路状造構



98-B区 道路状造構



98-B区 道路状造構



98-B区 道路状造構

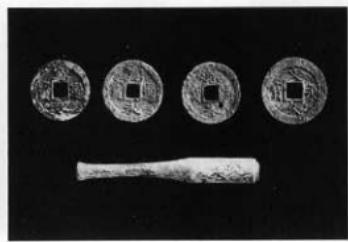
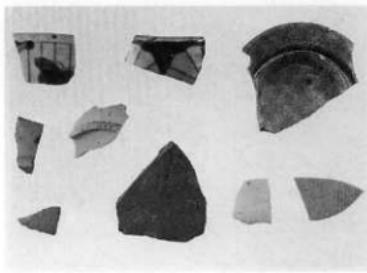
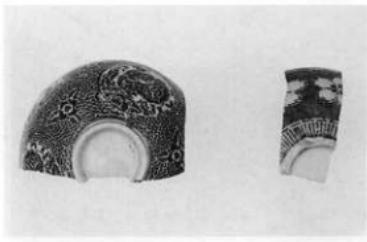
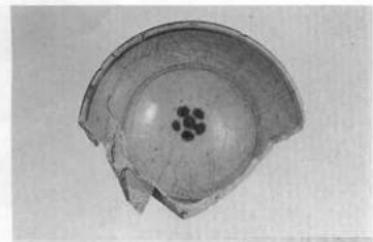


98-B区 道路状造構



98-B区 石（鐵）出土状況（矢印）

図版 16



第3次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ながみねとりであと
書名	長峰砦跡
副題	中央自動車道改築工事（上野原一大月間）に伴う発掘調査
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第168集
著者名	保坂和博・笠原みゆき・湯川修一・出月洋文
発行者	山梨県教育委員会・日本道路公団東京建設局
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 055-266-3016
印刷所	株式会社ヨネヤ
発行日	2000年3月31日

長峰砦跡概要

ふりがな	ながみねとりであと
所在地	山梨県北都留郡上野原大柄1143外
25,000分の1地形図	上野原
位置 東経	139° 3' 48"
位置 北緯	35° 37' 45"
位置 標高	370m
市町村コード	19441
調査原因	中央自動車道改築工事（上野原・大月間）に伴う発掘調査
調査期間	第1次調査 1995年9月1日～11月13日 第1次調査 1997年11月21日～12月25日 第1次調査 1998年5月7日～8月31日
調査面積	25,500m ²
縄文時代・中世・近世	
種別	城館跡
主な遺構	郭跡3 堀切跡1 横堀跡1 道路状遺構
主な遺物	青銅製鉄砲玉2点 陶磁器20点 銭貨36点 煙管1点 瓦類 石鎚・石核3点
特記事項	旧甲州街道を確認

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第168集

長峰砦跡

—中央自動車道改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷日	2000(平成12)年3月30日
発行日	2000(平成12)年3月31日
編集	山梨県埋蔵文化財センター
発行	山梨県教育委員会・日本道路公団東京建設局
印刷	株式会社 ヨネヤ

